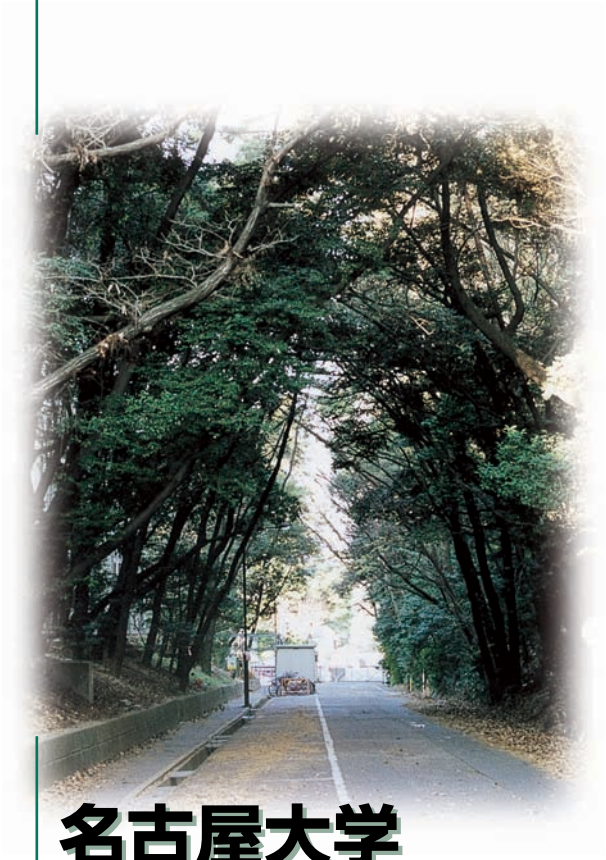


名古屋大学 キャンパスの歴史1（学部編）

神谷　智

名大史ブックレット
2

名大史ブックレット　2

名古屋大学　キャンパスの歴史1（学部編）

神谷　智

目　次

はじめに　……2
一　鶴舞キャンパス　―医学部医学科　……3
二　大幸キャンパス　―医学部保健学科・大幸医療センター　……20
三　東山キャンパス　―理学部・工学部　……24
四　名城・瑞穂・豊川キャンパスから東山へ
　　―文学部・教育学部・情報文化学部　……37
五　桜山・名城キャンパスから東山へ　―法学部・経済学部　……49
六　安城キャンパスから東山へ　―農学部　……56
おわりに
　　―名古屋大学キャンパスの歴史的特色と課題―　……62

はじめに

名古屋大学には現在、鶴舞・大幸・東山の三つの主要キャンパスがあります。このようにキャンパスが三つに分かれているのには、明確な理由があります。それは名古屋大学がつくられてきたこれまでの経緯＝名古屋大学の歴史に、密接なかかわりがあるからです。そこでこのブックレットでは、名古屋大学キャンパスの歴史について、各学部（正式名称としては「研究科」が多いのですが、ここでは学部名で表記していきます）の歴史と関連させつつ紹介していきたいと思います。

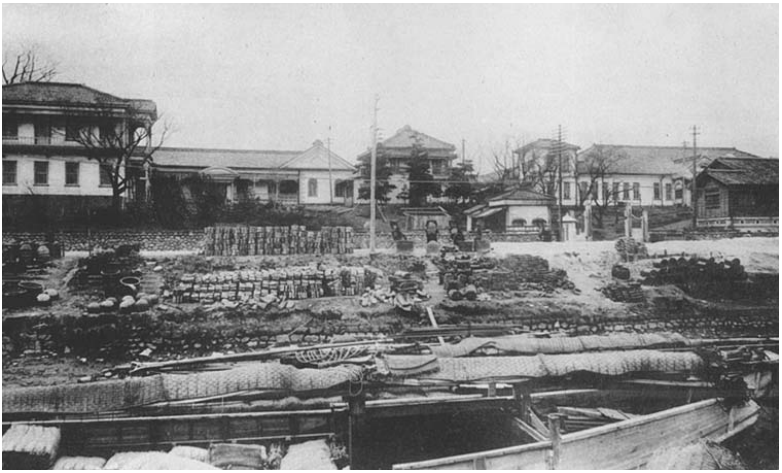
一　鶴舞キャンパス　―医学部医学科

◆明治四年仮医学校・仮病院の設置

現在の名古屋大学の中で一番古いキャンパスは、医学部のある鶴舞キャンパスです。それは名古屋大学において医学部が、一番古い伝統をもっていることと関係があります。

医学部は、一八七一（明治四）年八月に創設された仮病院と、続いて併設された仮医学校を前身としています。仮病院は名古屋藩の評定所跡（現在の名古屋市中区丸の内三丁目、愛知県産業貿易館本館）に、仮医学校はその西側、本町通を挟んで向かい側にあった、同じく名古屋藩の名古屋町奉行所跡（現同二丁目、同西館）に置かれました。仮病院は半年後の一八七二（明治五）年二月にいったん廃止され、仮医学校の方も同年八月の学制変革により廃校に及んだとされています。しかしこれは名古屋県の行政改革上の一時措置であったらしく、同年八月には仮医学校職員らの有志により「義病院」の名称で、同じ場所に再開されました。ただこの義病院も財政難から、翌一八七三（明治六）年二月には再び閉院されたとなっています。

しかし、病院復興の熱意は強く、愛知県権令井関盛良らの努力により、早くも同年五月には

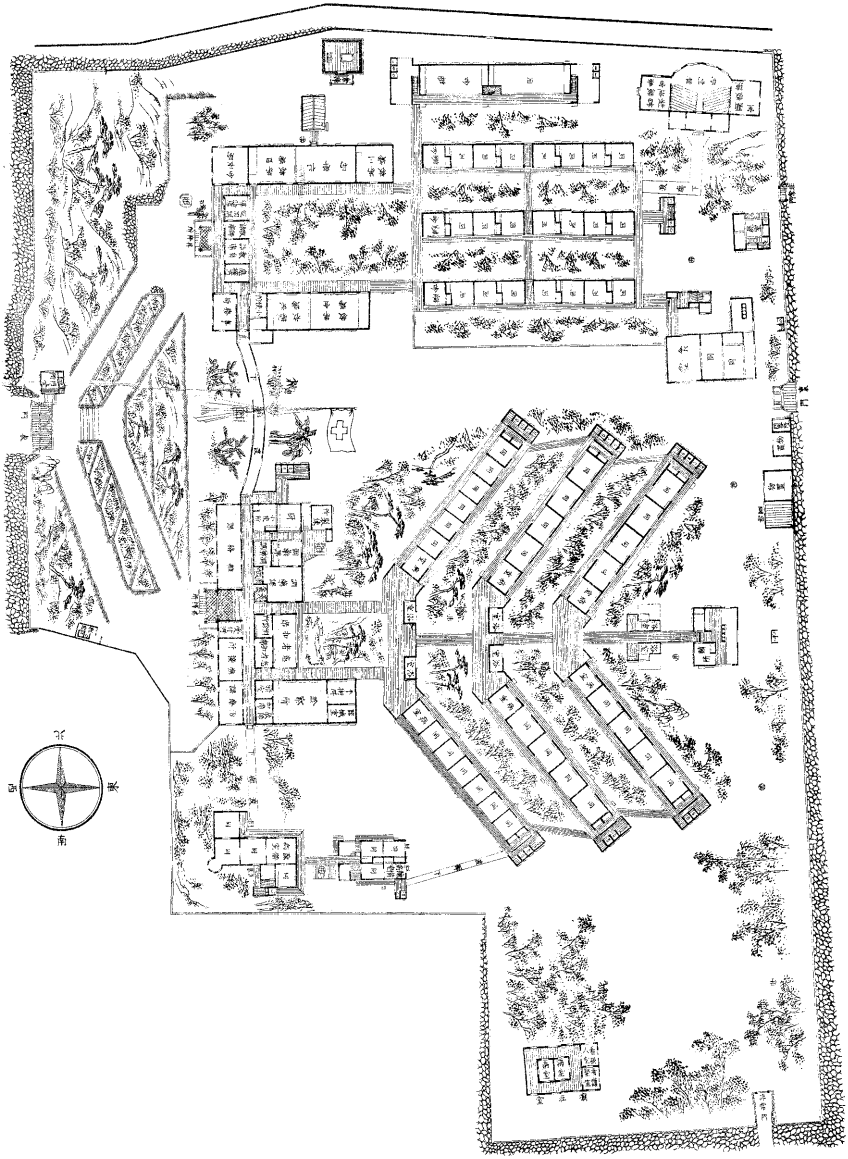


【図１】天王崎町にあった 1914 年頃の愛知県立医学専門学校
左（北）が学校、右（南）が病院、手前は堀川。

西本願寺掛所（現中区門前町一丁目、西本願寺別院）に病院が再興し、また医学校の方も未発足ながら、ヨングハンスほか一名の教師が迎えられました。同年一一月には医学講習場が正式に病院内に設けられ、医学校が名実ともに再興され、授業が始められました。

◆天王崎校舎と愛知県立医学専門学校

一八七七（明治一〇）年七月には、堀川東岸天王崎町にあった旧千賀氏屋敷跡（現中区栄一丁目）に医学校・病院ともに西本願寺から移転しました。それまでは既存の建物を修築して利用していたのですが、ここにはじめて、新築の医療と医療教育の専門施設を建てることができたのです。敷地面積は約二万平方メートルで、北側に医学校、南側に病院が配置されました。



【図２】天王崎町にあった 1880 年頃の公立病院・公立医学校の病棟・校舎図
上（北）が学校、下（南）が病院。

建物は診療棟一・病棟三・学校舎五（教場棟一・塾舎四）からなる木造建物でしたが、疑洋風建築で庭園樹木も設けられていました【図1・2】（前頁）。その後一八七九（明治一二）年六月に医学校はそれまでの三年六期の修学期間を四年八期に延長し、入学年齢も一五歳から一七歳に引き上げました。それまでの中等教育機関から、高等教育機関である「専門学校」に格上げされたのです。さらに一九〇三（明治三六）年三月の専門学校令と公立私立専門学校規程の公布により、愛知県立医学専門学校（愛知医専）と改称しました。なおこの間、医学校・病院ともに名称変更が何度かありましたが、これについては【図3】を参照して下さい。

◆校舎移転と大学昇格問題

天王崎校舎は明治二〇年代後半から三〇年代にかけて若干の増改築が行われてきましたが、明治四〇年前後になると、施設・設備が約三〇年近くも経って老朽化してきたことから、校舎の新築移転が本格的に考えられるようになりました。ただこの移転問題には、もう一つ大きな理由がありました。この明治末年頃から、単に高等教育をうけるだけではなく、学士号を取得できるようにという要望が、生徒から出されるようになりました。もとより大学当局もこれに否定的ではありませんでしたが、学士号取得＝大学昇格のためには現状の施設・設備では不十分であり、その拡充がまずは先決であるという認識がありました。これが校舎移転のもう一つ

年　月	名　称		場　所
	学　校	病　院	
1871(M 4). 8		仮病院	旧評定所
	仮医学校	↓	旧町奉行所
1872(M 5). 2	↓	×	
	↓		
. 8	×	義病院	旧評定所再置
		↓	
1873(M 6). 2		×	
. 5		仮病院	西本願寺掛所
.11	医学講習場	↓	
1875(M 8). 1	↓	愛知県病院	
	↓	↓	
1876(M 9). 4	公立医学講習場	愛知県公立病院	
	↓	↓	
. 6	公立医学所	↓	
1877(M10). 7	↓	↓	天王崎町・旧千賀氏屋敷跡へ移転
	↓	↓	
1878(M11). 4	公立医学校	↓	
1881(M14). 9	↓	愛知病院	
.10	愛知医学校	↓	
	↓	↓	
1901(M34). 8	愛知県立医学校	↓	
	↓	↓	
1903(M36). 7	愛知県立医学専門学校	↓	
1914(T 3). 3	↓	↓	現鶴舞キャンパスへ移転
	↓	↓	
1920(T 9). 7	県立愛知医科大学	↓	
1922(T11). 7	↓	愛知医科大学病院	
	↓	↓	
1924(T13). 5	↓	愛知医科大学附属医院	
	↓	↓	
1931(S 6). 5	官立名古屋医科大学	名古屋医科大学附属医院	
	↓	↓	
1939(S14). 4	名古屋帝国大学医学部	名古屋帝国大学医学部附属医院	
	↓	↓	
1947(S22).10	名古屋大学医学部（旧制）	名古屋大学医学部附属医院	
	↓	↓	
1949(S24). 4	名古屋大学医学部（新制）	名古屋大学医学部附属病院	

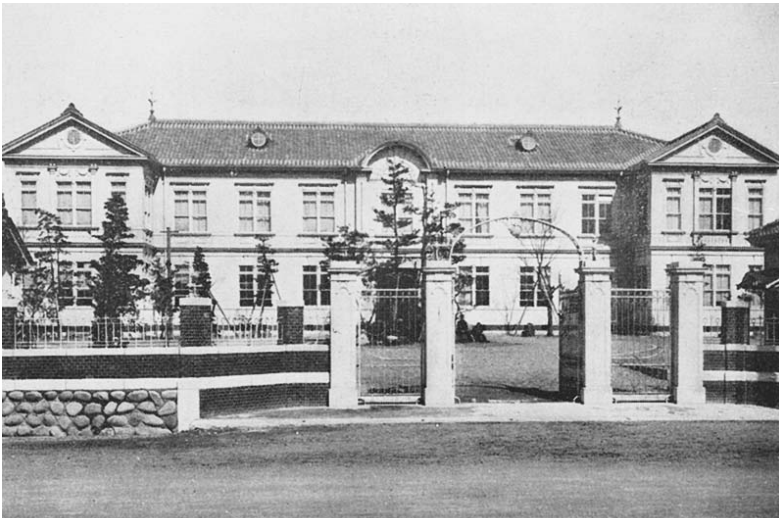
【図３】医学部前身校の沿革

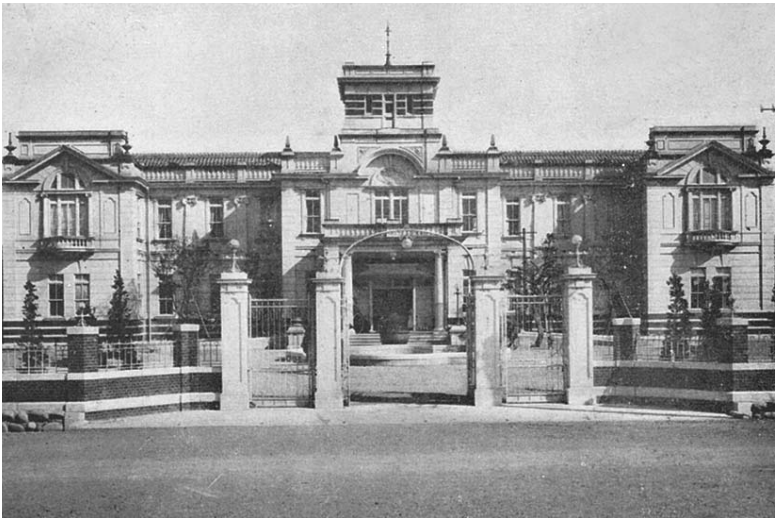
の理由です。

県当局の方も校舎の移転を検討していましたが、一方で県議会は経費の削減からこれに積極的ではありませんでした。しかし、明治四〇年代に入ると大学昇格、それも官立大学へ移管すれば、県の財政負担がなくなるという可能性もでてきたため、その前提となる施設・設備の拡充＝校舎移転に賛成するようになったのです。このように、その後展開される官立大学への昇格実現のための大きな布石＝前提として、校舎移転は企図されたのです。

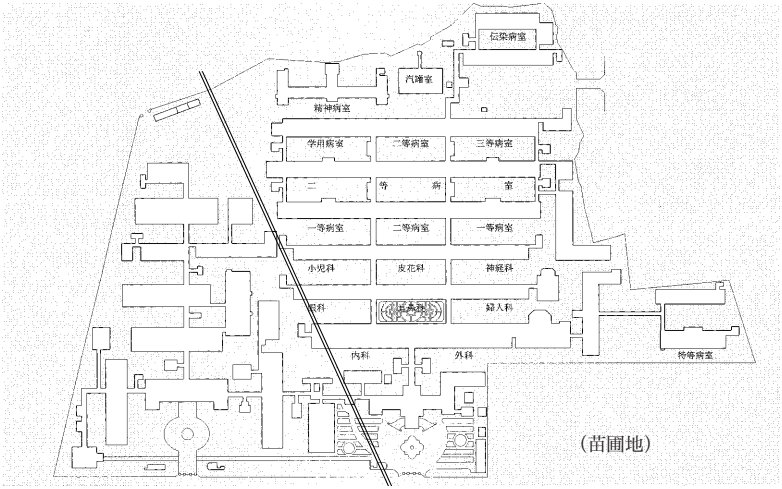
◆鶴舞キャンパスへの移転

一九一四（大正三）年三月、愛知医専は天王崎校舎から中区（現昭和区）鶴舞町の鶴舞公園に隣接した敷地に移転しました。現在の鶴舞キャンパスです。総工費約七〇万円、敷地面積は六万一〇〇〇平方メートル余、建物面積で約二万九〇〇〇平方メートル余になりました。敷地面積で天王崎町のほぼ三倍に広さになりました。西三分の一を学校、東三分の二を病院が占め、正門も東西二つあり、それぞれの正門と玄関の間にはロータリーが置かれました【図4】。学校は正面に本館、その左右に校舎二棟が広がり、その奥に校舎八棟がありました。一方病院の方も、南から本館が一棟、診察棟が三棟、その北奥に二階建ての病棟が大小あわせて八棟もある大施設でした。木方十根さんの研究によれば、東南側は鶴舞公園に隣接しており、そこは公





【図４】1914 年（上）愛知県立医学専門学校正面（下）愛知病院正面



【図５】1914年移転当初の鶴舞キャンパス図
二重線より左（西）が学校区域、右（東）が病院区域。学校が前（南）に広く出ており、病院が奥（北）に入っています。

園用樹木の苗圃地になっており、南の公園本体および東の名古屋高等工業学校と、病院とを覆い隔てる緩衝緑地帯の役割をしていたということです。さらに東西に分かれてはいたものの、学校部分は公園側に近い南部分に広く、病院部分は逆に公園から遠い北側部分が広いという配置になっていたとも述べられています。公園を市民の憩いの場としておいてみると、この時期の学校に対する肯定的認識と、病院に対する否定的な認識が窺えます【図５】。

◆県立愛知医科大学

大学昇格への大きな追い風となったのが、一九一八（大正七）年二月に制定公布された「大学令」です。当時日露戦争から第一

次世界大戦にかけて大きな経済発展を遂げていたのですが、それと比例してこの時期高等教育の重要性が主張されるようになりました。その結果として高等学校令の改正とともにこの大学令の制定が行われ、以後大学や高等学校（旧制）の増設がさかんに行われるようになりました。

これにより一九二二・三（大正一一・二）年の二年間に、新潟・岡山・長崎・金沢・千葉にあった五つの官立医学専門学校は官立医科大学に昇格しました。これと並行して、愛知県立医学専門学校が一九二〇（大正九）年六月に、京都府立医学専門学校は翌年、それぞれ（県立）愛知医科大学・京都府立医科大学へと、大学に昇格しました。

愛知医専は当初「官立大学」、すなわち「県立から官立への移管」と「大学昇格」を同時に行うことを目標としていました。しかし文部省はこれを受け入れなかったため、愛知医専は県立のまま単に大学昇格を実現するという方針に転換し、まずは大学昇格を実現したのです。そのため官立移管問題は検討課題として、その後も残りました。

なお、この大学昇格後に施設増築のため敷地拡張を行い、一九二三（大正一二）年頃には約八万五〇〇〇平方メートルとなり、一部北東部を欠くものの、ほぼ現在の台形型に近い敷地にまで広がりました。先の木方さんは、東南部にあった樹木の苗圃地には臨床講義室・外来患者診療場が建てられ、病室もありましたがそれは「特等病室」であり、逆に北側奥の拡張部分には精神病棟と伝染病棟がたてられたと指摘しています。前述した当時の認識がここにも表れています。

◆官立名古屋医科大学から名古屋帝国大学医学部へ

官立への移管問題は、愛知医科大学設置後一時、名古屋に総合大学＝帝国大学を創設する運動が高まりをみせたため、その中に吸収されていた感がありましたが、この運動が停滞・行き詰まりをみせると、再び愛知医科大学の官立移管運動が再開されました。最終的に一九三一（昭和六）年五月に官立移管され、名称を変更、名古屋医科大学となりました。なお、官立医科大学には附属図書館を設置することが定められていたため、この時に近代的鉄筋コンクリート三階立て、講堂をあわせもった附属図書館も建てられました（開館は翌年三月、【図6】参照）。

「大学昇格」と「官立移管」を達成した以上、あとは「総合大学」＝「名古屋帝国大学」の創設だけが最後に残された課題となりました。具体的には、名古屋医科大学を基にした医学部と、戦時下で軍事用技術の優先ということもあって理学部・工学部を加えた、三学部からなる総合大学創設案でした。この創設運動は官立移管直後から開始され、紆余曲折を経た後、一九三九（昭和一四）年四月に医学部と理工学部の二学部からなる名古屋帝国大学（名帝大）が創設されました。

◆空襲と疎開

しかし創設六年後の一九四五（昭和二〇）年、鶴舞キャンパスは空襲により多大な被害をう

【図６】1945年空襲直後の名帝大医学部鶴舞キャンパス（名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵）
中央で焼け残っているのが図書館。

けます。空襲は三月一二日・一九日・二五日の三度あり、前二日は医学部が、後一日は附属病院が大きな被災をうけました【図6】。焼失率は医学部が九七・二％、附属医院が五一・三％で、附属図書館と病院半分を残すのみとなってしまいました。その後当時の文部大臣の視察があり疎開を促され、医学部の特殊戦時研究施設や薬品・器具などを、愛知県瀬戸市や岐阜県瑞浪町などへ漸次移してはいきました。しかし経費の問題もあり、順調にはいかなかったようです。

ただその後も空襲は度重なり続き、病院は名古屋市民の治療機関でもあったため、疎開よりはむしろ、空襲で被害にあった数多くの負傷者の治療にあたら

なければなりませんでした。

◆東山移転構想と薬学部構想

一九四六（昭和二一）年五月頃に考えられたと思われる復興計画では、医学部は東山キャンパスに移転し、既存の附属医院は分院として鶴舞に残すというものでした。ただ医学部の東山移転自体は全く新しいものではなく、名古屋帝国大学創設当初から構想されていたことでした。戦前の東山キャンパス計画図によれば医学部は附属病院とともに、現在の理学部・農学部から農学部農場を経て、共通教育研究施設（旧核融合科学研究所跡地）に至るまでの広大な敷地に、建設計画されていました。しかし、一方で同年七月の復興計画では医学部の応急建物を鶴舞に新営するとあり、また一一月頃に策定されたと思われる応急復興計画でも三ヶ年の予定で旧敷地（＝鶴舞キャンパス）に応急建物を新営するとあり、この段階でも東山移転はあくまで計画＝構想でしかなかったと思われます。

そのためその後も、鶴舞キャンパスで復興がおこなわれていきましたが、東山移転構想も全く立ち消えたわけではありません。一九五一（昭和二六）年一月に行われた第二回整備計画委員会において、医学部のうち基礎系教室を東山キャンパスに置き、附属病院はそのまま鶴舞に置くことが、あいかわらず検討課題として残されていました。さらに一九六二（昭和三七）年

九月の同委員会においては、東山キャンパス理学部の木造校舎建物地区を医学部の予定地区として充当することが提案されました。また翌年にも医学部長から学長宛へ東山移転の要望書が出されています。

これは医学部の教育・研究部門を東山で行い、あわせて理・農・医の各学部が共同・連携して研究もできるようにし、鶴舞には臨床治療の関係部門を残す構想でした。ここでは病院は市内中心に、学校（この場合は「医学研究」＝大学といった方がよいでしょうか）は郊外にといった認識が窺え、前述した「学校は近くに、病院は遠くに」という戦前の認識とは、全く逆転していることがわかります。

なおこの過程で歯学部・薬学部構想も出され、実際一九六五（昭和四〇）年に薬学部設置の概算要求が文部省に出されています。この要求は認められなかったものの、この時構想された薬学部は、先の理・農・医の三学部だけではなく、工学部・教養部の教員の研究分野の連携・共同を組織するという意図も見うけられ、医学部東山移転計画の延長線上にあるものであったと思われます。

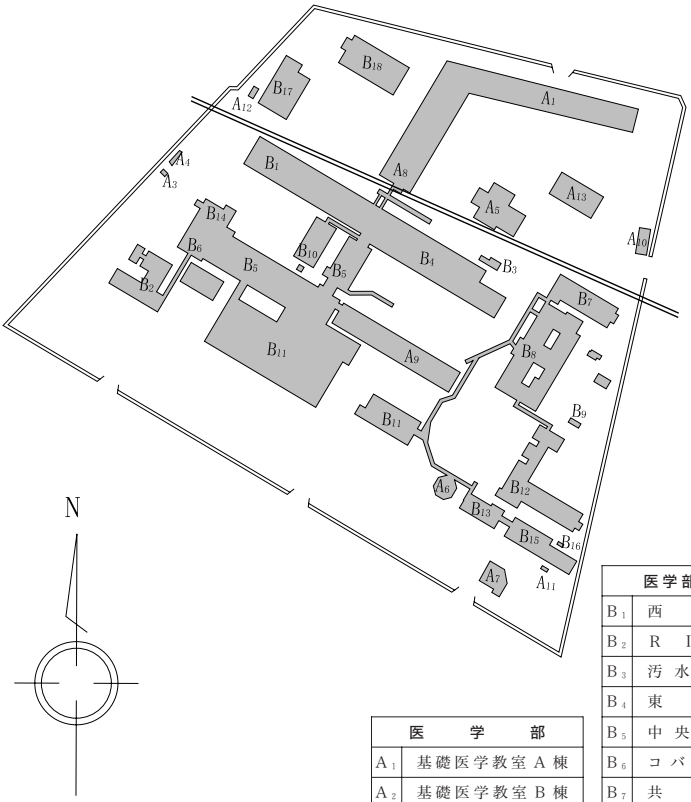
◆敗戦後の復興と建物の増改築

一九四五（昭和二〇）年八月一五日の敗戦後、鶴舞キャンパスは早急に復興にとりかかりま

す。医学部は千種区田代町にあった愛知県有の青年教育施設である昭和塾堂（現名古屋市千種区城山町、城山八幡宮内愛知学院大学大学院研究棟）の転用をうけて授業を開始し、病院も知多郡河和町・豊川市・岡崎市などにあった旧海軍の建物を鶴舞へ移築し、病室などに利用しました。

その後建物を増改築していくなかで徐々に、東西であった病院・医学部の配置を、北に医学部、南に病院という現在の配置に変えていきました。戦前には病院区域が北奥、学校区域が南手前に広いという配置でしたのが、全く逆転してしまいました【図7】。病院と学校＝大学に対する認識の変化をここでも窺うことができます。これは、それまでの伝染病に対する忌避認識と病院とが一体視されていたのが、戦後結核におけるストレプトマイシンの開発など医療技術の飛躍的向上により、伝染病が減少していくのとともに、病院が肯定的なものと認識され、他方大学は教育的側面より病原菌研究など医学研究的側面が強く認識され、それに対する不安感が増大したためと考えられます。戦後における社会認識の転換の一側面が窺えます。

なお敷地も、多少の増減を経緯したものの、周辺の土地を併わせていき、一九七〇（昭和四五）年には、現在の台形型の敷地になりました。そしてこの一九九九（平成一一）年には、南正面に高層建築一四階立ての新病棟が全館完成し、景観は一新しました。



医学部	
A1	基礎医学教室A棟
A2	基礎医学教室B棟
A3	動物飼育室
A4	危険物倉庫
A5	図書館・講堂
A6	講義室
A7	記念館・学生ホール
A8	事務室
A9	臨床医学教室
A10	警務員詰所
A11	RI焼却炉
A12	倉庫
A13	アイソトープセンター

医学部附属病院	
B1	西病棟
B2	RI診療室
B3	汚水ポンプ室
B4	東病棟
B5	中央診療施設
B6	コバルト治療室
B7	共済会館
B8	看護学校・助産婦学校寄宿舎
B9	ポンプ室
B10	高気圧治療室
B11	外来診療棟
B12	看護婦宿舎
B13	第2号病棟
B14	リニヤック治療室
B15	第1号病棟
B16	アイソトープ貯蔵庫
B17	中央動力室
B18	各種学校

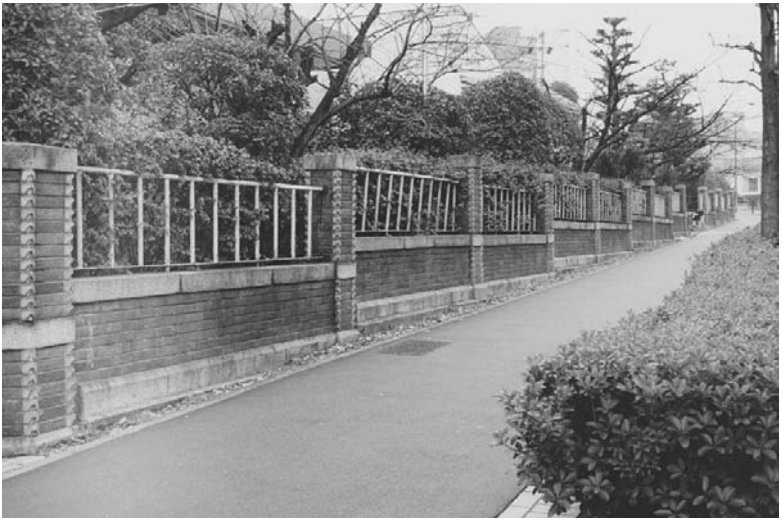
【図7】1973年鶴舞キャンパス図

二重線より上（北）はA大学区域が主、下（南）がB病院区域が主。【図5】とは逆に病院が前に、大学が奥になっています。

◆鶴舞キャンパスの歴史的景観

鶴舞キャンパスは戦災にもあっており、また病院という性格上、建物の改装改築は避けられないこともあって、長い歴史をもちながらも、戦前の様子を伝える建物はほとんど残っていません。鉄筋建築であった附属図書館は戦災を免れていたのですが、医学部創立百周年記念として、一九七一（昭和四六）年三月に、鉄筋建物に建て替えられてしまいました。最後の戦前建築であった看護学校・助産婦学校寄宿舎も一九九八（平成一〇）年に取り壊わされてしまいました。

現在、往時の歴史を伝えるものとして残っている建造物は、残念ながら正面三ケ所の門柱と外塀の一部（東南側、鶴舞公園方向）のみです。正門は愛知医専時代からのものですが、外塀は一九三〇（昭和五）年に改修されたものです。しかしスクラッチタイルとテラコッタによって仕上げ直された様子は、材料的にもデザイン的にも昭和初期の特徴を、門柱とともによく伝えています【図8】。



【図８】現在の鶴舞キャンパスに残されている（上）門柱と（下）外塀

二　大幸キャンパス　―医学部保健学科・大幸医療センター

◆臨時附属医学専門部と医学部附属医院分室

鶴舞キャンパスとともに、医療関係施設が集中しているのが、医学部保健学科・大幸医療センターのある大幸キャンパスです。両者の設置は比較的最近で、また小さなキャンパスでもありますが、その歴史は古く、大幸医療センターは一九四三（昭和一八）年にまで遡ることができます。

前述したように、名帝大医学部は一九三九（昭和一四）年に、名古屋医科大学を母体に創設されました。しかし当時は戦時中であり、軍医の需要が急増しているにもかかわらず、軍医は不足していました。そのため、最小限必要な医学知識をもっている軍医の短期養成機関として「臨時附属医学専門部」が、医学部のある全国の主要大学に設置されました。名帝大での設置は、医学部創設直後の同年五月でした。施設は医学部の講義室を共用し、臨床実習は名古屋市内の病院に依頼して急場をしのいでいました。

専門部は高まる軍医需要に応ずるため急速に拡充が続き、一九四三（昭和一八）年までに次々

と専門部専用の新営建物・施設が木造ではありましたが建てられていき、また職員の増員など組織的にも整備されていきました。また同年には名古屋市中区在住の陸田しようさんから、同区新栄町（現中区新栄二丁目）にあった陸田ビルの寄附をうけ、専門部の診療病院として利用することとなりました。これをうけて、同年九月に医学部附属医院分室が、寄附された陸田ビルにおかれました【図9上】（次頁）。

翌年四月には専門部は「附属医学専門部」と改称し、七月には先の医学部附属医院分室が廃止され、かわりに医学部附属医院分院が同じ場所に設置されました。

◆専門部の廃止と分院の改組

しかし敗戦になると、専門部は一九四六（昭和二一）年度から生徒募集を見合わせ、最後の学生が卒業した一九五〇（昭和二五）年三月に自然廃校となりました。そのため残った医学部附属医院分院は、それまでの専門部の臨床実習病院の性格を改めざるをえなくなり、組織機構を改革、医学部の第二臨床附属病院として再スタートをきることになったのです。そして一九四九（昭和二四）年五月の新制大学への移行に伴い、医学部附属病院分院と改称されました。

その後分院は、名古屋市都市計画の区画整理のため、一九六一（昭和三六）年九月に東区東門前町（現東区東桜二丁目）に新病院を新築、陸田ビルから移転しました【図9下】（次頁）。

【図 9】（上）1926 年頃の陸田ビル（下）1962 年頃の東門前町医学部附属病院分院
（名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵）

◆医療技術短期大学部の設置（大幸キャンパス）

昭和四〇年代になると、分院においても患者数が増加し、それに伴い外来や病室が手狭になり、また施設も老朽化したため分院の移転が、本格的に検討されるようになりました。そのような状況下にあった一九七〇（昭和四五）年四月、愛知教育大学名古屋校の大学部が、刈谷市の新キャンパスに移転したため、その跡地に分院を移転しようという動きがおこりました。交渉の結果、一九七五（昭和五〇）年七月に正式に名古屋大学の所管となり、名古屋大学の第二のメディカルキャンパス＝現在の大幸キャンパスとなりました。一九七七（昭和五二）年には医療技術短期大学部が設置され、旧愛教大の改修校舎を利用することになりました。医療技術短期大学部は、それまであった医学部附属の看護学校（一八九四（明治二七）年設置）・助産婦学校（同年設置）・診療放射線技師学校（一九五五（昭和三〇）年設置）・臨床検査技師学校（一九六一（昭和三六）年設置）の四つの付設学校を統合したものでした。さらに一九七九（昭和五四）年七月には新病院が完成、分院がここへ移りました。

その後、一九九七（平成九）年に分院は大幸医療センターとなり、また翌年医療技術短期大学部も廃止され医学部保健学科となり、現在に至っています。

三　東山キャンパス　―理学部・工学部

◆理系地区

地下鉄本山駅の交差点から東南へ、四谷通に沿って緩い坂を登り、東山キャンパスに入ると、最初に右手（西側）眼前に現れる建物は、学生会館と北部厚生会館（北部生協）です。その周辺には工学部関係の建物（1・2・3・7号館・新1号館など）が林立しています。そしてここから四谷通を挟んで反対側（東側）にも工学部関係の建物（4・5・8・9号館・先端技術共同研究センターなど）が建っています。さらにその南と東に理学部の建物（A～G館など）があります（以下、巻末現況図を適宜参照）。現在「理系地区」と呼ばれているところですが、東山キャンパスの歴史もこのあたりからはじまります。

◆東山キャンパスの決定

名古屋帝国大学の創設に伴い、新キャンパスの建設については、現在の東山地区のほかにいくつかの候補地がありました。当時の愛知県知事は矢田川廃川敷地（現名古屋市北区光音寺町・

川中町周辺）を考えていましたし、ほかにも鳴海町（現名古屋市緑区）・天白村（同天白区）・猪高村（同名東区）・日進村（現日進市）などが名乗りをあげていました。当初は、県有地約四〇万六五〇〇平方メートルがある矢田川廃川敷地が有力ともいわれていましたが、一方で鳴海町からは後からの追加分を含め三三万平方メートルを無償寄付したいという申請もあり、候補地の決定は流動的な状況でした。

最終的には、文部省・大蔵省当局が実地調査を行い、東山公園隣接丘陵地約六〇万平方メートルが選定されました。当初有力視されていた矢田川廃川敷地の県有地は必要面積が不足しており、かつ地形が横長で凸凹が多く、キャンパスとしては不適当とされました。決定後も用地交渉で紆余曲折がありましたが、一九三九（昭和一四）年五月には東山地区の無償提供が決定されました。しかし結局この時点では、約四七万二七〇〇平方メートルの用地しか取得できませんでした。

◆理工学部の設置から理学部・工学部へ

理学部・工学部は、名古屋帝国大学が創設された一九三九（昭和一四）年に理工学部として設置されましたが、この年はまだ学生も入学しておらず、実質の開設は翌年四月になりました。開設当初は、東区西二葉町（現東区白壁二丁目、明和高校付近）にあった愛知県立第一中学校（現

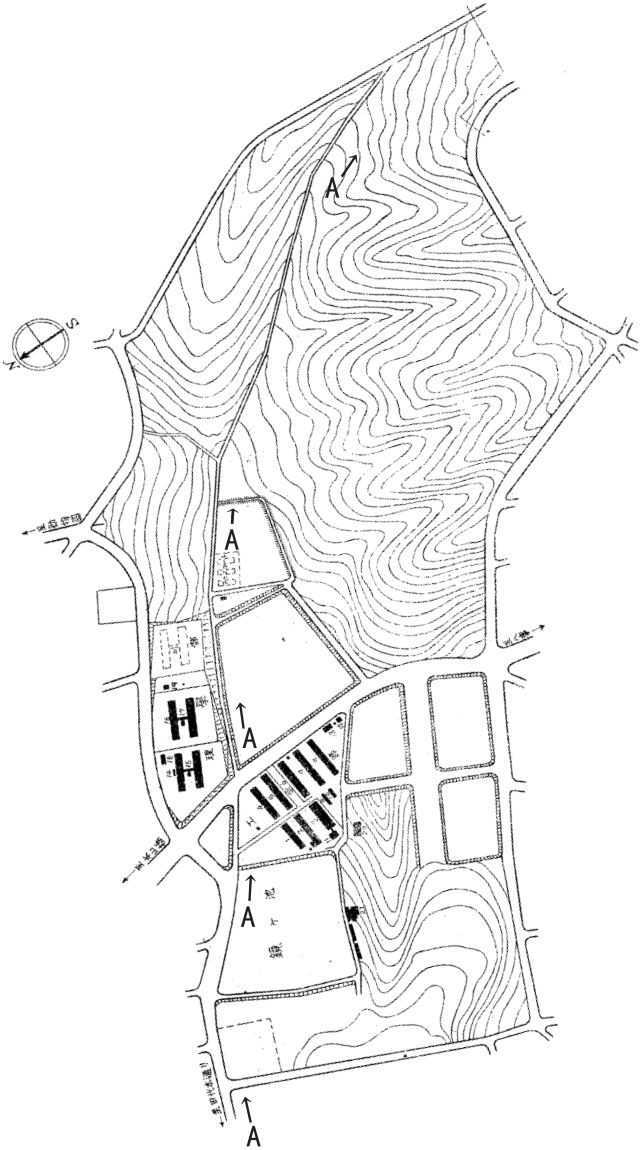
愛知県立旭丘高校の前身）が移転した跡の旧校舎を仮校舎として利用しました。ただここは、第二学年までの教育施設であったため、一九四一（昭和一六）年度末までには新しい本校舎を建設しなければなりませんでした。それが東山キャンパスです。

理工学部は、開設二年後の一九四二（昭和一七）年四月に理学部と工学部に分かれ、まず工学部が東山キャンパスに移転してきました。工学部が東山キャンパスに移転してきた最初の学部です。理学部についても、当初は工学部と同じく四月の移転予定でしたが、工事が遅れたため、六月の移転となりました。

◆工学部校舎

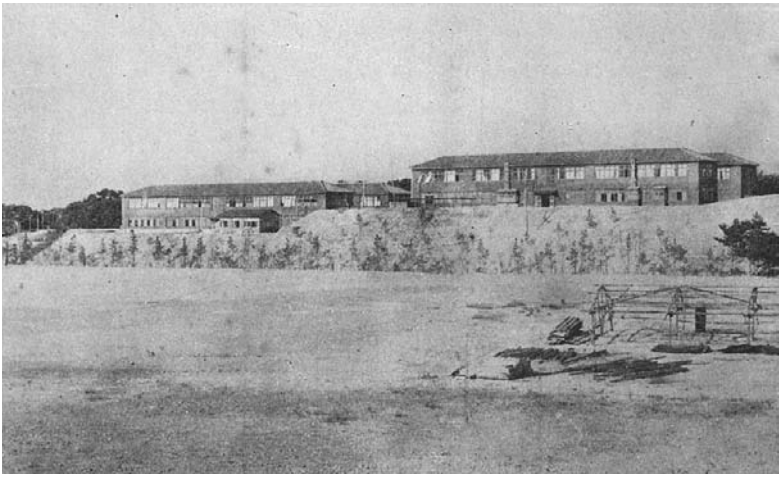
理学部・工学部の校舎は、当初から現在の理系地区とほぼ同じ場所に建てられていましたが、建物配置は現在と大きく異なっています【図10】。

工学部校舎は、最初木造二階建（一部平屋建）で三棟（四・五・六号棟）が、続いて木造平屋建（一部二階建）で五棟（一・二・三・七・八号棟）が、四谷通と鏡池に挟まれた地区に建てられました。今の北部厚生会館・工学部7号館が建っているあたりです。当初は鉄筋建築を考えていましたが、戦時中で物資不足のため、やむをえず木造校舎となったようです。また現在の建物はやや南西方向を向いていますが、当初の工学部校舎はほぼ南面向き東西方向、すな



【図 10】1942 年東山キャンパス図

中央が四谷通、その上（東）が理学部、下（西）が工学部校舎。矢印Aは耕地区画整理時の旧道。

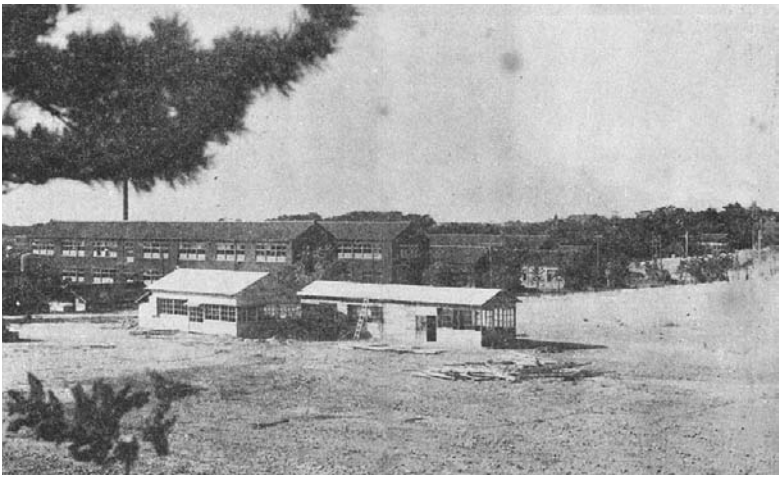


1942年東山キャンパス
ほとんど生えていないことがわかります。

わち四谷通に対して垂直方向に方向に建てられていました。

◆理学部校舎

そして四谷通を挟んで反対側、現在の工学部8・9号館や先端技術共同研究センターがある区域に、理学部校舎が四棟建てられました。工学部と同様木造でしたが完全な二階建でした。新しく耕地区画整理された場所であり、樹木もない高台となっていました【図11】。また翌一九四三（昭和一八）年七月には平家建二棟が増設されました。現在では、深い緑に覆われていることもあって、現工学部の建物は見えにくくなっています。工学部をよく知らない文系の方のなかには、ここに建物が建っているとは思っていない方もいるでしょう。



【図 11】現在の理学部Ａ館付近からみた
左（西）が工学部、右（東）が理学部校舎。当時は樹木が

またこの地区の樹木も、一見すると昔からあった森林と思いがちですが、そうではありません。いま述べたように、ここは樹木もほとんど生えていませんでした。いま林立している樹木はこの約六〇年間で育った樹木です。

◆「緑のトンネル」

驚かれるかもしれませんが、この地区の南側に一本のトンネルがあります。四谷通三丁目交差点から学内に入り、四谷通沿いに少し行った東側にそのトンネルの入口はあり、そこから理系食堂を通ってグリーンサロン東山から農学部へと抜けています。つまりじつは、深い緑に覆われた「緑のトンネル」と呼ぶことができる道のことです（表紙写真）。ただし南側は樹木が少なく、特に理系食堂の反対側、理学部Ｇ号館

前は、間伐された状態です。さらによく観察すると、その手前の四谷通入口近くにおいても、同じく南側は北側に比べ樹木が少ない。これは、この南側、現在の工学部4・5号館が建てられている場所に、昔は運動場（東山運動場）があったため、樹木を深くは植えなかったためと思われます。それでも「トンネル」のように緑が深く見えてしまうのは、そのすぐ南側に工学部5号館が近接して建っているため、南からの日光が終日遮断されているためでしょう。

この道は、じつはもともと東山キャンパスができる以前の、耕地区画整理の時にできた道で、本来は鏡池の北の道路から学生会館前の南を通り、この道へつながっていました【図10】A（二七頁）。ちなみに、現在の鏡池北の道路は、西から来る場合、鏡池を過ぎると急に左手（北）へ曲がり、四谷通三丁目交差点を経て東山公園方面へ向かっていますが、この道路は東山キャンパスが建設された際に新しく出来た車道です。そのためこの道の南側＝理学部校舎北面も当初は現在のように樹木に深くは覆われてはいませんでした。

◆「緑の学園」構想

東山キャンパスの建設当初は、農学部周辺より奥になる東南部区域を除き、前述したように耕地区画整理地そのままで、緑は少なかったようです。初代渋沢総長は「緑の学園」を構想し、植樹に力を入れて、風致を高めるようにしました。『名古屋帝国大学敷地内植樹調査報告』を

策定させ、それに基づいてこの理学部・工学部周辺に樹木を植え、さらに校舎が完成するごとに植樹をしていきました。そのため、初期にできたこの地区の方が緑が多く、前述したように自然の樹木と見間違える景観です。

現在でもこの方針は続いているようです。たとえば「緑のトンネル」の最奥部分、農学部に近いところに、最近「グリーン・サロン東山」が建てられましたが、その建設の際、「緑のトンネル」の一部が伐採されてしまいました。そして新たに幼木が建物周辺に植えられています。これをどう考えるかは専門家の方の判断に委ねるほうがよいのでしょうが、六〇年前と同じく、緑を伐採して建物をたて、改めて新たに緑を植え直すという方法が依然続いていることがわかります。

◆空襲と疎開

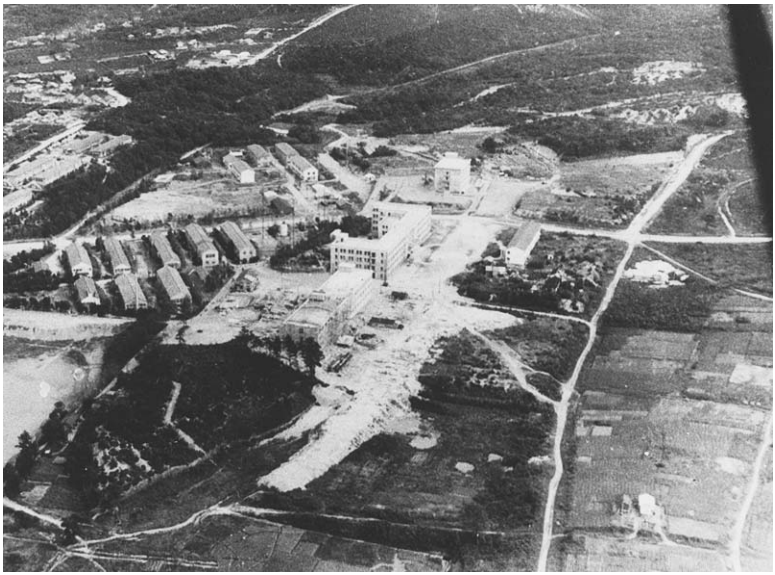
このようにして東山キャンパスは発足しましたが、その三年後には医学部同様、空襲にあいます。一九四五（昭和二〇）年四月一九日と二七日に、付近にあった高射砲陣地を目標として投下された爆弾の一部がキャンパス内にも落下し、校舎への直撃は免れたものの、振動や爆風のために、窓ガラスが割れたり、屋根瓦が落ちたり、天井が抜け落ちるなどの被害が出たといいます。また五月一四日にも再び空襲をうけ、大学本部や航空医学研究所とともに理学部生物

学教室が焼失しました。ただし、前述した鶴舞キャンパスに比べれば、被害はわずかでした。

また幸いなことに、三月に鶴舞キャンパスが空襲にあっていたため、それまで具体化していなかった疎開が緊急に決まり、この五月の空襲より前に、東山キャンパス理・工学部の疎開はすでにおおむね終了していました。別に、書物や重い機器は地下に埋蔵もされたようです。疎開先は愛知県内はもとより、奈良・三重・岐阜・静岡・長野・石川・富山・新潟と中部地方全体に及んでいます。こうして東山キャンパスは、発足後わずか三年で離散してしまいました。

◆敗戦とキャンパス再建（高蔵キャンパス）

敗戦後、ただちに復興計画が策定されました。当時工学部は、東区西二葉町のキャンパスのうち七五・三％を焼失していました（おそらく敗戦後はこのキャンパスはほとんど使用されなくなったと思われます）。かわりに昭和区広池町にあった名古屋市立名古屋商業学校（現向陽高校敷地）の校舎を補修して一部使用していましたが、この復興計画によれば、元歩兵第六連隊・高蔵工廠・熱田工廠の建物の転用をうけるはずとなっていました。しかしこれらの建物は実際にはＧＨＱ／ＳＣＡＰ（連合国軍最高司令官総司令部）の利用に供されたため、結果としてはわずかに熱田区六ツ野町（現熱田区六野一）にあった高蔵工廠の転用をうけたのみでした（高蔵キャンパス）。



【図 12】1954 年東山キャンパス（中日新聞社提供）
鉄筋建築は工学部１号館南側建物と理学部Ａ館の一部のみ。キャンパスは現在のグリーンベルトまでで、右(南)の文系地区はまだキャンパスに入っていません。

一方理学部については、疎開地からの引き揚げは困難をきわめたにもかかわらず徐々に東山に集結し、敗戦の年の一一月には授業を再開しています。焼失した生物学教室は、当初は環境医学研究所（元航空医学研究所）の建物の一棟を間借りしていましたが、一九四九（昭和二四）年一月には焼失跡地に再建されました。続いて一九五二（昭和二七）年三月には、地球科学研究室も新築されました。

◆工学部の東山キャンパス復帰
―画期的な建築交換移転

工学部の建物は、初の鉄筋建築で

ある1号館が一九五一（昭和二六）年に、続いて五四年には2号館の一部が完成しました。しかしこの当時1号館も南側建物だけで、北側建物は建てられていませんでした（一九六二（昭和三七）年完成）【図12】（前頁）。一方で、敗戦後の復興がすすむにつれて、東山キャンパスへの集結が全学的な大きな課題となっていました。理学部は東区西二葉町キャンパスを焼失していたため、結果的にほぼ集結を終えていましたが、工学部は先の高蔵キャンパスが移転対象でした。

名古屋大学は文部省への予算交渉の努力の結果、他大学に比べ予算配分が相当考慮され、土地購入・建物建設は順調に進んでいました。しかし、それでも当時の整備計画どおりには進展していませんでした。文部省からの財源のみでは、おのずと限界があったのです。

そこで考えられたのが建築交換移転という方法でした。これは高蔵キャンパスを希望する民間会社に、工学部の建物を東山キャンパスに建ててもらい、これを名古屋大学が譲り受ける替わりに、高蔵キャンパスを譲渡交換するものでした。これには法的解釈から、大蔵省と種々の交渉を必要としましたが、当時の事務局長であった須川義弘さんほかの努力により、実現に何とかこぎつけることができました。この建築交換移転によって工学部2号館の未建設部分が一九五六（昭和三一）年に完成し、工学部は東山に集結できたのです。なお、この名古屋大学が考え出した建築交換移転は、以後他の国立大学や諸官庁でも行われるようになりました。名古屋大学事務局の、歴史に残る成果です。

◆木造校舎から鉄筋建築へ

理学部でも、一九五三（昭和二八）年に鉄筋建築の本館（現在のA館）が新築され、その後も徐々に増築され、一九六四（昭和三九）年三月に現在の形となりました。さらに【図13】（次頁）のように次々と新しい鉄筋建築が増築されていきました。なお、東山運動場にあった生物学教室などの木造校舎は、C・D館が建てられていく中で取り壊されていきました。また北側にあった木造校舎六棟も、工学部百万ボルト超高圧電子顕微鏡研究室や超高圧力高温実験室の建設のため、一九七三（昭和四八）年八月の第二物理学教室の取り壊しにより姿を消しました。

一方工学部では一九六〇（昭和三五）年六月の整備委員会で、建物の配置上または大学の美観上、鉄筋建築の1・2・3号館を並列に建設することが正式に決定され、鏡池南側が3号館建設予定地として確保され、一九六六（昭和四一）年に完成をみました。さらに一九六一（昭和三六）年三月には総合運動場（陸上競技場・野球場）が通称「山の上」にできたことにより、それまでの東山運動場跡地には4・5号館が建てられていきました。そのほかの工学部主要建物は、【図13】（次頁）のようになります。なお、工学部の木造校舎も、一九七〇（昭和四五）年に、現在の機械学科実験室を建てる際に、六・七・八号棟が取り壊されたのを皮切りに、最終的には、一九七六（昭和五一）年に現在の北部厚生会館を建設するため、五号棟（旧航空工学科実験室）が取り壊されたのを最後としてなくなりました。

	新　　築	最　終　増　築
工　学　部		
1号館	1951. 3	1970. 2
2号館	1954. 3	1956. 5
3号館	1962. 3	1970. 2
4号館	1964. 3	1970. 3
4号館管理棟	1967.12	
5号館	1967.12	1987.11
6号館	1963. 2	1967.12
7号館A館	1971. 2	
7号館B館	1971. 2	1980.12
8号館	1975. 6	1979. 2
8号館北館	1987.11	
9号館	1980. 9	1983. 3
理　学　部		
A館	1953. 3	1964. 3
A－2号館	1979. 3	
B館	1965. 3	1966. 3
C館	1967.12	1968.11
D館	1968.11	
E館	1967.12	1979. 3
F館	1980. 3	1985. 7
G館	1989.11	

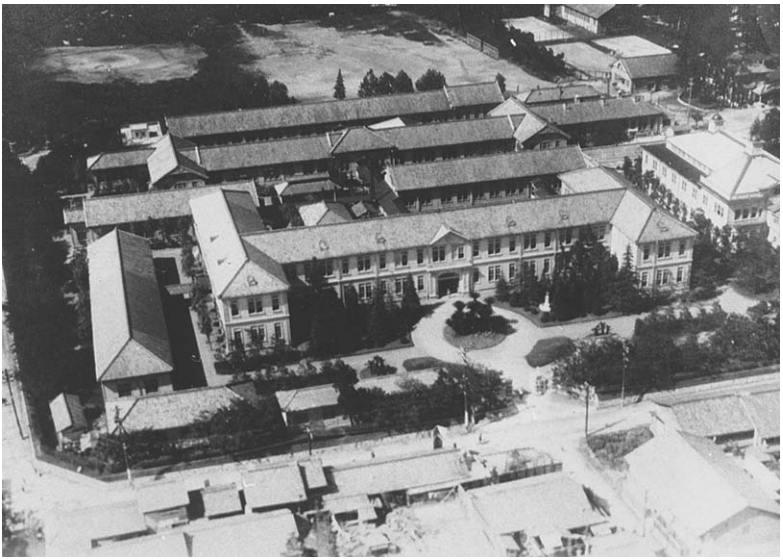
【図 13】工学部・理学部の主要建物沿革　※僅かな増築は除いています。

ところで、一九九五（平成七）年には、鏡池東側にあった工学部実験室建物を解体して、新たに工学研究科1号館（工学部新1号館）が建てられました。そして現在、1号館北側建物跡地に新しく総合研究棟が建てられようとしています。今は、古くなった鉄筋建築を取り壊して、新たな鉄筋建築を建てる時代となったのです。

四　名城・瑞穂・豊川キャンパスから東山へ　―文学部・教育学部・情報文化学部

◆文系地区

理系地区はグリーンベルト北側に位置していますが、反対の南側は、一番西に情報文化学部があり、東へ文学部・教育学部・法学部・経済学部の各文系学部の建物が整然として建ち並んでいます。グリーンベルトをはさんで、工学部1・2・3号館とちょうどシンメトリー的に配置されています。これらのうち西側にあたる建物＝文学部・教育学部・情報文化学部の三学部に関係する前身旧制学校として、第八高等学校と岡崎高等師範学校がありました。



【図 14】1933 年第八高等学校（中日新聞社提供）

◆第八高等学校（瑞穂キャンパス）

旧制の高等学校は、帝国大学とは別に、高等教育を行う学校として創設されました。当初は、第一から第五高等学校（東京・仙台・京都・金沢・熊本）までと山口高等学校の六校あり、専門部（法・工・理・医などの専門学科）と大学予科（帝国大学入学への予備教育）とが置かれていました。しかし明治三〇年代に入り、京都帝国大学が新設されたり、地方に医学専門学校が創設されるようになると、専門部の方は振るわなくなり、一方で付随的に置かれていた大学予科の方が主流となり、拡充されていくようになりました。

第八高等学校（八高）は、文字通り全国第八番目の高等学校として一九〇八（明治

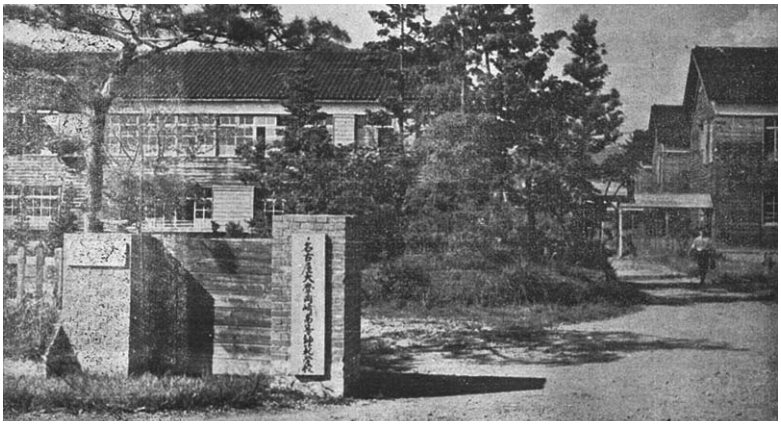
四一）年三月に創設されました（山口高等学校は高等商業学校に転換）。先の五校に続いて新設されていた六高（岡山）・七高（鹿児島）は、それぞれ第三高等学校医学部・鹿児島造士館高等中学校の流れを汲んでいたのに対し、八高は前身校をもっておらず、その意味で新しい流れをもった高等学校でもありました。

実質の開校は七月で、当初は東区南外堀町（現中区丸の内三丁目）にあった愛知県立第一中学校が前述の西二葉町へ移転したため、その跡の旧校地・旧校舎を借用、東区小川町の妙本寺はじめ付近の七ヶ寺に代用学寮が設けられました。翌年九月から一二月にかけて、愛知郡呼続町大字瑞穂字山ノ畑（現瑞穂区瑞穂町山の畑）の地に新校舎が順次完成し、並行して移転していきました（瑞穂キャンパス【図14】）。

◆岡崎高等師範学校（豊川キャンパス）

高等師範学校は、師範学校・中学校・高等女学校の教員を養成するための高等教育を行う学校として創設されました。当初は、東京と広島に置かれていましたが、この二校は昭和四（一九二九）にそれぞれ文理科大学に付置された形となっていました。また一九四四（昭和一九）年三月には金沢にも創設されました。

岡崎高等師範学校（岡崎高師）はこれらにつづく第四番目の高等師範学校として、一九四五



【図 15】1950 年頃の名古屋大学岡崎高等師範学校

（昭和二〇）年四月に創設されました。しかし、戦時中であったため、学科は理科（数学・物象・生物）のみで、校地・校舎を新設せず既設の設備を利用すること、附属学校も当分のうちは代用学校ですませるという条件がつけられました。

このため、当初は岡崎市明大寺町字栗林にあった旧岡崎市立工業学校の校地・校舎（現愛知教育大学附属中学校）を使用、附属学校もすぐには設置されませんでした。五月には入学試験が行われ、七月に入ると生徒が集まりはじめ、校内の教室が臨時宿舎としてあてられました。

ところが入学式・開校式もまだ行われていない七月二〇日に空襲にあい、ほぼ全焼してしまいました。そのため仮校舎を岡崎市針崎町の三菱重工業針崎工場青年学校に、生徒宿舎を同じ針崎町の勝鬘寺に移しました（振風寮）。そして七月三〇日に延期されていた入

学式、八月一二日に開校式、一〇月一日に始業式が行われるという、変則的な日程で出発しました。この後本格的な移転が検討された結果、一二月九日に豊川市牛久保町中代田にあった旧海軍工廠工員養成所とその宿舎へ移転がなされました（豊川キャンパス）【図15】。

◆空襲と疎開（河和キャンパス）

一方、八高はそれよりも早く、一九四五（昭和二〇）年三月一二・一九・二五日の三度の空襲にあい（医学部と同じ日です）、一部の建物を除いて多くを焼失してしまいした。その年の卒業式は焼け残った体育館で行われましたが、校旗も卒業証書もない形だけのものでしたそうです。一方その年の新入学生も、校舎がないため当初は勤労動員先で待機、結局入学式は行われず、七月一〇日から学徒隊に組織された形で、動員先での分散入学となりました。入学式に代わり、校長や教員が動員先へ出張して行われた前代未聞の入学宣誓式が終わったのは、敗戦直前の八月八日でした。

敗戦後は、分散して授業が再開されました。名古屋市内の生徒は、焼け残った体育館や付近の熱田中学校・尾張中学校・愛知県立商業学校などの校舎を借用し、地方からの生徒は知多郡河和町（現美浜町）の全忠寺を宿舎に、河和町南部国民学校を教室としていました。この後、一九四六（昭和二一）年の九月に河和町の旧海軍第一航空隊跡地に移転が行われましたが、翌

年初めには早くも瑞穂キャンパスへの復帰運動が始まります。加えて一月一四日には河和校舎で火災発生、再び瑞穂と河和の分散授業を余儀なくされました。このためもあってか復興のための寄附金も集まり、一九四七（昭和二二）年九月には瑞穂キャンパスに新校舎が再建されました。

◆文学部の設置（名城キャンパス）

名帝大時代には文系学部がありませんでしたが、敗戦直後から文系新三学部（文・法・経済）設置の動きがおこりました。一九四七（昭和二二）年一〇月に帝国大学の名称がなくなり、名古屋大学（旧制）になると、文系学部設置が具体的に検討されるようになりました。文系学部の候補地として、名古屋城内にあった元陸軍歩兵第六連隊跡地（現中区二の丸、名古屋城二の丸内）があがり、一九四八（昭和二三）年六月には大学本部がここに移転を行っています（名城キャンパス）。

当初名古屋大学では、名古屋経済専門学校（五章で後述）・八高を基として一九四六（昭和二一）年より文・法・経済の文系三学部の新設要求を対文部省に行っていました。この段階では夜間部の併設も考えられていました。この三学部要求は、法文学部の一学部とした縮小したかたちで設置を認められましたが、再度折衝の結果、八高を基幹とした文学部と名経専を基幹

【図 16】1960 年名城キャンパス（中日新聞社提供）

とした法経学部の二学部新設で落ち着きました。

しかし理系を含む八高側からすれば、文学部のみでは教員・予算等を振り替えることが難しいのも明らかでした。そのため、八高側では一方で新制名古屋大学の一般教養課程を担当する方向をめざす動きもしており、最終的にはこの方向で八高は新制名古屋大学に合流することとなりました。ただ、八高の教員の中には、新設された文学部に移った方もありました。このようにして文学部は法経学部とともに、旧制の一九四八（昭和二三）年九月に設置されました。校舎は当初の構想通り、先の元陸軍歩兵第六連隊兵舎を利用することになりました【図16】。

◆教育学部の設置（名城キャンパス）

一方岡崎高師の方では当初、他の師範学校・青年学校と合併、愛知学芸大学（現愛知教育大学）を設立する方向で動いていました。しかしこの構想は一時頓挫し、つぎに名古屋大学に合流する働きかけが始まりました。名古屋大学の方でも、文学部に教育学科五講座を設置する動きがあったからです。ただ教育学科は結局設置が遅れ、旧制ではなく、翌一九四九（昭和二四）年の新制文学部の教育学科として発足することが、一九四八（昭和二三）年六月頃には決まりました。またこれら一連の動きの中で、岡崎高師も八高とともに一般教養課程を担当することに落ち着きました。岡崎高師は文（教育）学部の前身ではなく、教養部の前身となったのです。

ところが、この決定後の七月、占領軍側から教育学部の設置が強く要請されたため、文学部教育学科構想は急展開し、教育学部として発足することになりました（ただし一講座のみ）。特に名古屋大学の場合、大学全体として岡崎高師を包括することで、教育学部の設置がより有利になったようです。こうして教育学部は、翌一九四九（昭和二四）年五月、新制名古屋大学の発足とともに設置されました。校舎はこれも名城キャンパスに置かれました。

◆教養部の設置（瑞穂・豊川キャンパス）

前述したように、名古屋大学では一般教育を担当する部局を設置するために、八高と岡崎高

師を包括し基礎とする計画が進められました。そしてこの一般教育を担当する部局は教養部（名古屋大学瑞穂分校・同豊川分校）として、新制名古屋大学が発足した一九四九（昭和二四）年五月に実質的に設置されました。各分校はそれぞれ第八高等学校・岡崎高等師範学校校舎を利用しています。ただこの時点では「教養部」は内部規定による呼称でした。

一九五二（昭和二七）年には、両分校が瑞穂キャンパスに統合され、名古屋大学分校（教養部）となり、豊川キャンパスは農学部農場となりました（後述）。その後、名古屋大学分校は、一九六三（昭和三八）年四月にやっと法令的に、教養部として認められました。

◆東山キャンパスの追加取得

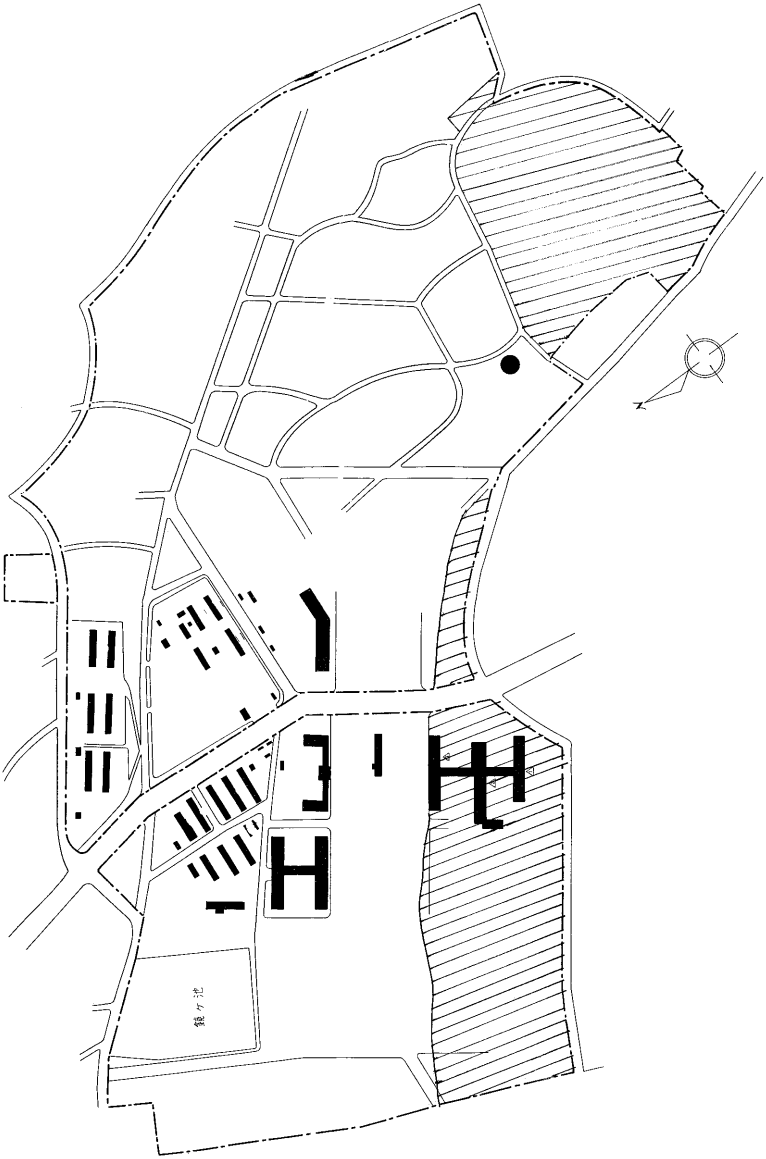
東山キャンパスでは、当初用地取得後も、徐々に土地を購入してきました。しかし、それでも一九四八（昭和二三）年当時で約五三万二六〇〇平方メートルしかなく、当初の必要面積六〇万平方メートルにも達していませんでした。一九五〇（昭和二五）から一九五二（昭和二七）にかけて策定された整備計画では、医学部を除き東山キャンパスに集結させることが決まっていたのですが、このままでは面積不足であり、隣接する用地を新たに取得する必要にせまられていました。そのため約二三万三〇〇〇メートルを新たに取得する計画がたてられましたが、その取得は国費を充当することとされていました。しかし当時の財政状況から鑑みて、予算措

置が思うようにいく見込みもないため、計画を縮小せざるをえなくなり、結局一九五四（昭和二九）年度からの六年間で約一四万六〇〇〇平方メートルの土地を取得したにとどまりました。しかしそれでも、この土地取得＝拡張によって、東山キャンパスは全体で六九万七五〇〇平方メートルとなり、創設後一五年にしてやっと、創設当初の目標面積を確保することができたのです【図17】。これによって文系地区の建設が可能となりました。

◆文学部・教育学部・教養部の東山キャンパス移転

このようにして文系地区の用地確保はできましたが、実際の移転は、法学部・経済学部が先になりました（五章で後述）。文・教育学部および教養部の移転には、先の工学部高蔵キャンパス移転の際と同じく、建築交換移転という方法が採用されました。当初は愛知県立女子短期大学（現愛知県立大学）と交渉しようとしましたがまとまらず、その間に名古屋市からも建築交換移転の申し出があり、最終的には名古屋市との建築交換移転に落着しました。すなわち、教養部のある瑞穂キャンパスの土地・建物等を名古屋市に譲渡するかわりに、名古屋市の負担で東山キャンパスに教養部と文・教育学部の一部を建設してもらうというものでした。

文学部は一九六三（昭和三八）年一月に、教育学部は同年一一月に移転し（附属高校は同年四月、同中学校は翌年一月）、また翌一九六四（昭和三九）年三月には教養部が移転し、ここ



【図 17】1959 年東山キャンパス図
斜線部が新規に取得した地区。

に文系地区への集結を完了したのでした。建築交換移転がなければ、これほどはやくに、東山移転は完了しなかったと思われます。

なお、名古屋市に譲渡された瑞穂キャンパスは、現在名古屋市立大学経済学部・人文社会学部となっています。ここには、旧八高のシンボルであった「蘇鉄の木」が依然残されており、その名残りを伝えています。また八高正門も現在は、博物館明治村（愛知県犬山市）に移築され、その正門として残されています。

◆情報文化学部の設置

一九九三（平成五）年四月に四年一貫教育（共通教育）が実施されたのを期に、教養部は同年三月に廃止されました。かわりに情報文化学部が新学部として四月に設置されました。組織上は、教養部と情報文化学部の間には歴史的連続性はありませんが、教養部の教員の多くは、そのまま情報文化学部（あるいは大学院人間情報学研究科）の教員になりました。

五　桜山・名城キャンパスから東山へ　―法学部・経済学部

◆名古屋高等商業学校（桜山キャンパス）

文系地区のうち一番東側、四谷通に近いところにあるのが法学部と経済学部です。

経済学部は、名古屋高等商業学校（名高商）を前身としています。高等商業学校は一八八四（明治一七）年の東京高等商業学校を皮切りに、一九〇〇年代に神戸・山口・長崎・小樽に官立が四つ、大阪に市立が一つ創設されましたが、その後一時期新設は行われませんでした。しかし第一次世界大戦を契機として諸産業が成長し、優れた企業経営者の養成が必要という要請から、新たな高等商業学校の創設を望む声が、都市部ではおこっていました。そこで一九二〇（大正九）年一一月名古屋に、一〇年ぶりに第六番目の官立高等商業学校が創設されたのです（翌一九二一（大正一〇）年五月より実際の授業を開始）。

名高商の校地は愛知郡呼続村大字呼続字川澄（現瑞穂区瑞穂町川澄）にありました（桜山キャンパス）。校地候補の決定は一九一八（大正七）年六月、その後整地・基礎工事が行われ、一九二〇（大正九）年四月には、すでに文部省に引き渡されていました。しかし校舎建設は遅れ、

【図 18】1933 年頃の名古屋高等商業学校（中日新聞社提供）

授業開始の一九二一（大正一〇）年五月の時点でも、本館と寄宿舎が出来ていた程度で、授業のかたわらに建設工事が行われているという状況でした。しかも、数度の暴風雨に見舞われたため工事は滞り、校舎完成は翌年までかかりました【図18】。

◆名古屋経済専門学校

戦時下になると総力戦体制のための科学技術の振興が重要視され、名高商は一九四四（昭和一九）年三月に名古屋工業経営専門学校と名称を変えるとともに、授業内容も工業重視の内容に変わっていきました。なお、すでに在学している名高商生が卒業するまでの移行措置として、名古屋経済専門学校（名経専）も併置さ

れました。空襲の被害は全校舎の一〇％が焼失したにとどまりましたが、武道場・雨天体操場や生徒控室は三菱航空機の分工場となっており、これによる授業の不自由は敗戦後まで続いたようです。

名古屋工業経営専門学校は敗戦の翌一九四六（昭和二一）年三月に廃校となります。実質二年間しか存在しませんでした。ところが名高商廃止の移行措置として残されていた名経専の方がこの年より新入学者を募集し、また経営科を新設して名古屋工業経営専門学校の学生を継続して受け入れていくことになりました。すなわちそれまでの本科を経済科と経営科に分け、前者に名高商の課程を復活させ、後者に名古屋工業経営専門学校の課程を残そうとするものであり、全体として戦時下の工業色を著しく減少させる結果となりました。

◆法経学部から法学部・経済学部へ

一方名古屋大学では前述したように、一九四六（昭和二一）年より文系三学部の新設要求を文部省に対して行っていました。これについて名経専側では、この名古屋大学の構想に合流するか、これとは別に単科大学に昇格するかという議論がありましたが、結局は名古屋大学に合流して、発展的に解消することにしました。そしてこれも前述しましたが、三学部要求は結局文学部・法経学部の二学部として認められ、一九四八（昭和二三）年九月に法経学部が、文学

部とともに設置されました。

発足した法経学部は、初めからキャンパスが二つに分かれていました。法律・政治学科は、文・教育学部と同じく、名城キャンパス内におかれました。一方経済・経営学科は旧名経専の桜山キャンパスをそのまま引き継いで利用していました。そして一年半後の一九五〇（昭和二五）年三月に、法学部と経済学部の分離が認められ、その結果、文・教育・法学部が名城キャンパスに、経済学部が桜山キャンパスにという形になったのです。

◆法学部・経済学部の東山キャンパス移転

文系地区の土地取得の経緯については、先にふれておきました。しかしその文系地区への移転は、法学部と経済学部の方が最初でした。そしてここでもやはり、先と同じく建築交換移転の方法が採られていました。すなわち経済学部のある桜山キャンパスの土地・建物等を名古屋市に譲渡するかわりに、名古屋市の負担で東山キャンパスに経済学部・法学部の鉄筋建築を（ほかに学生寮と学生会館の一部も）建設してもらうもので、これは一九五七（昭和三二）年七月に、名古屋市との間で決められました。これに基づいて法学部・経済学部の建物が東山に新築され、一九五九（昭和三四）年三月には経済学部が、同年七月には法学部が、それぞれの旧キャンパスからの移転を完了しています。

なお、名古屋市に譲渡された桜山キャンパスは、現在名古屋市立大学医学部およびその附属病院となっています。ここにも、旧名経専のシンボルであった「其湛の塔」が残されており、その名残りを伝えています。また現在の名古屋大学の学生寮である「嚶鳴寮」の名も、名高商の学寮名を受け継いだものです。

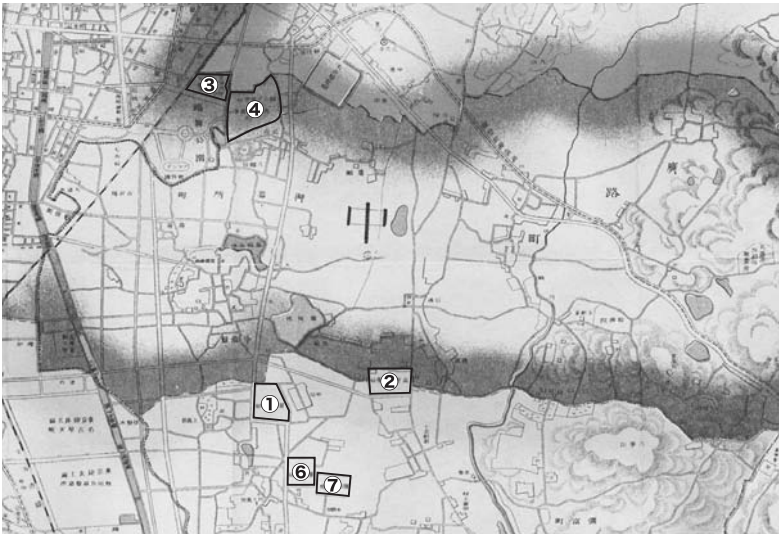
別に現在、金山―名古屋大学間の市バスは、途中名古屋市立大学医学部のある桜山と、名古屋市立大学経済学部・人文社会学部のある滝子を通っています。どちらも旧名大キャンパスがあったところです。この系統の市バスは、金山に近い高蔵キャンパスを含め、この時期分散していた名古屋大学のキャンパスを繋ぐための路線であったという歴史を持っています。

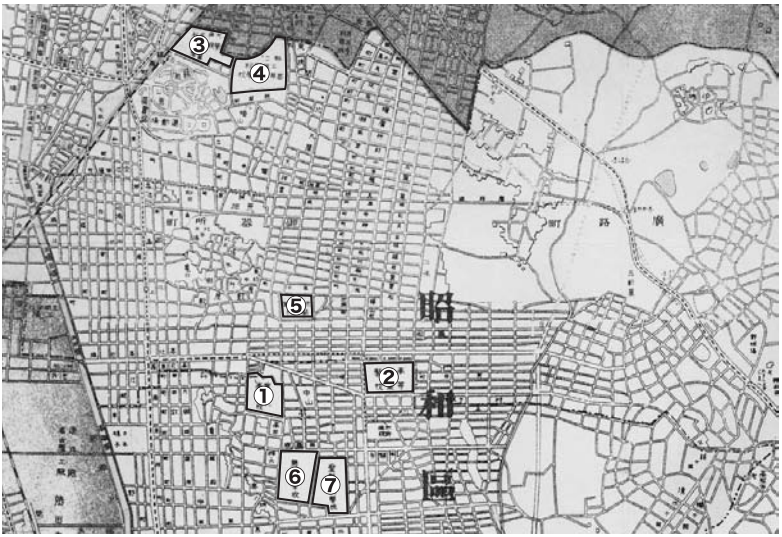
◆市街地拡大と大学キャンパス

大学キャンパスの建設場所は、都市市街地の拡大と密接な関係を持っています。二〇世紀に入り日露戦争から第一次世界大戦にかけて、産業が急速に発達すると、東京・大阪をはじめとして、都市市街地が急速に拡大し始めます。名古屋も同様で、それまでは中央線と東海道線を結ぶラインより西側が市街地でしたが、この時期より以降、このラインより東へと徐々に市街地が拡大していきます。学校のキャンパスはそれなりの広い土地を必要とします。この時期新しく設置された学校が、旧市街地でそのような広い土地を購入することは困難でした。そのた

め便利な市街地に隣接しつつも、まだ市街地化はされていない、これから市街地化されようとする都市周縁部に、どうしてもキャンパスを建設せざるを得なかったようです。このため明治末から昭和初期にかけて市街地となった、当時の名古屋周縁部＝新興市街地に、鶴舞・瑞穂・桜山のキャンパスいづれもが存在する結果になったのです。ちなみにこの付近には、名古屋高等工業学校（一九〇五（明治三八）年創設）・愛知県立工業学校（一九〇五（明治三八）年移転、以上二校あわせて現名古屋工業大学）・名古屋商業学校（一九二八（昭和三）年移転、現向陽高校敷地）・第五中学校（一九〇七（明治四〇）年創設、前述の熱田中学校の前身、現瑞陵高校、場所は愛知県立大学前キャンパス跡地）・愛知県立商業高校（一九一九（大正八）年創設、場所は現瑞陵高校）などがあり、いずれもこの時期に建てられた学校です【図19】。

なお、この傾向はその後も同じで、たとえば敗戦後から高度成長期までに市街地化された本山から八事周辺までの地域には、名古屋大学東山キャンパス・南山大学・中京大学・名城大学が先行してキャンパスをおいており、さらに昭和四〇年前後より以降に郊外へ移転した愛知学院大学・名古屋商科大学・中部大学がある日進市・春日井市東部は、その後急速な住宅地化が進んでいます。大学ができると住宅地化するということになりましょうか。





【図 19】（上）1921 年と（下）1937 年の名古屋市東南部図

市街地が急速に拡大したことがわかります。 ①第八高等学校②名古屋高等商業学校③鶴舞キャンパス④名古屋高等工業学校・愛知県立工業学校⑤名古屋商業学校⑥第五中学校⑦愛知県立商業学校

六　安城キャンパスから東山へ　―農学部

◆創設当初からあった農学部設置構想

三章でもふれましたが、「緑のトンネル」を抜けた左手に農学部の建物があり、さらにその奥には小さな農場などがあります。

農学部は、情報文化学部を除く名古屋大学八学部の中では一番遅く設置されたのですが、農学部の設置自体は、じつは名帝大創設時の最初から構想されていました。昭和十二（一九三七）年一二月に愛知県会で可決された名帝大の設置の意見書「綜合大学建設方に関する件」には、「満州」「支那」において活躍するための人材養成が創設理由の一つにあげられていました。それをうけてか、一九三八（昭和一三）年一月の『名古屋新聞』にも、農学部設置の具体案として「岐阜高農（＝岐阜高等農林学校）の昇格を断行して、綜合大学の一部門とし、満州国政府と北支政権から土地の無償提供をうけて、国策的な大演習農場・演習林として、北海道帝大が所有林からあげる純益金を経常費の一部にあてているごとく、生産即教育の殿堂を実現し、講座は農業・畜産・林業・農芸化学の四つにする」と書かれています。財源として満州に演習

林をもらい、その収入で大学経営をしようという構想です。戦時下、財政が十分ではないという状況下での、苦肉の策であったと思われます。また同年三月に衆議院本会議で可決された「名古屋帝国大学設立に関する建議」においても、農学部の設置が求められていました。

◆紆余曲折、遅れる農学部設置

その後も各界で農学部設置運動が展開されましたが、しかし結局同年六月に決定された名古屋帝国大学設立準備調査会の決定要項では、農学部ははずされてしまいました。なお、名帝大創設後の昭和十八（一九四三）年度にも農学部設置の予算を作成して文部省に提出しましたが、農学部志望者が少ない・南方開発は農学士ではなく、高等農林学校卒で間に合う・経費不足などの理由で認められませんでした。

敗戦後、すぐに取り組まれた新学部創設の動きの中でも、前述した文系三学部とともに、農学部も入っていました。最初は、戦前と同じように岐阜農林専門学校（岐阜農専、一九四四（昭和一九）年四月に岐阜高等農林学校を名称変更）を包括して、春日井市にある旧陸軍鷹来工廠跡地を農場にしようというものでした。しかし、岐阜農専側には名大に合流せず単科大学として昇格する動きもあり、一九四七（昭和二二）年一〇月の新学部創設委員会では、ひとまず農学部設置ははずされまてしまいした。その後、大学の設置は一府県一大学とすることなど

を定めた「国立大学設置一一原則」が出され、また一九四八（昭和二三）年六月に出された「国立新制大学実施要領」で「国立新制大学における学部又は分校は他の府県に跨らぬもの」と規定されたため、岐阜農専を新制岐阜大学の基礎としよう動きもあって、一九四九（昭和二四）年二月の名古屋大学評議会で、岐阜農専の包括は事実上不認可となりました。

◆農学部の設置

新制大学設置には間に合いませんでしたが、農学部設置への努力はその後も続けられます。七月の名古屋大学協議会で碧海郡安城町にある愛知県立安城農林高等学校（旧安城農林学校、現安城市池浦町）などを基礎として農学部創設委員会を設置することが決定されます。安城は「日本のデンマーク」とも呼ばれる農業先進地域でした。安城町や愛知県は名古屋大学農学部創設に対して積極的で、焼失して復興したばかりの安城農林高等学校のみでは農学部施設としては不十分と判断、これに加えて同じ安城町にあった愛知学芸大学安城分校（旧愛知青年師範学校、後愛知学芸大学附属中学校が置かれました。現安城市新田町小山の安城市立総合運動公園付近）の敷地を譲り受けることが考えられました。ところが、安城農林高等学校施設・農場の方は、教育学部附属実験高等学校職業課程を併置するとして位置づけられてしまった（ただし、結局これは実現しませんでした）こともあってか、結局農学部には包括されませんでした。

【図 20】1954 年頃の安城キャンパス（富田武氏所蔵）

東加茂郡加茂村（現豊田市）と南設楽郡鳳来寺村（現南設楽郡鳳来寺町）にあった同校の二つの演習林のみが転用され、先の愛知学芸大学附属中学校の校地・施設に、安城町から寄附された付近の土地を農場として併せ、一九五一（昭和二六）年四月にやっと設置の運びとなりました（安城キャンパス）【図20】。

その後一九五三（昭和二八）年には豊川分校が廃止されたためその跡地を農場として、また一九五五（昭和三〇）年七月には北設楽郡稲武町にある共有林を演習林として利用できるようになり、さらに一九五九（昭和三四）年二月には北設楽郡設楽町に草地研究施設が発足しました。

◆孤立する安城キャンパス

しかし他の学部が、分散していたとはいえ、ま

がりなりにも名古屋市内にあったのに対し、農学部の学生は教養課程を終えると、名古屋より遠く安城へと赴かなければなりませんでした。そのため、他学部の授業への参加や他学部の図書・実験機器の利用が困難であること、他学部の教職員・学生との接触が少ないこと、通学やアルバイト上不便であること、部活動やサークル活動への参加が困難であること、などの理由により、学生自治会・大学院学生会・職員組合などから、東山移転の要請が出されました。

もとより大学側も、農学部のこのような状況に無関心ではありませんでした。たとえば当時教養部の教員でした牧島久雄さん（のち学生部次長）は、一九五八（昭和三三）年四月に、農学部一年生対象となっている自らの授業時間を割き、アンケート調査を含めたガイダンスを行ったり、別に安城キャンパスへの学部見学を実施して、農学部生の問題に取り組んでいます。ちなみにこの農学部ガイダンスは、翌年からは各学部別のガイダンスへと発展しています。

当時の名古屋大学整備委員会では、農学部は安城キャンパスで完成することとされていましたが、このような状況もあって教授会でも農学部のキャンパス問題が検討され始め、一九五五（昭和三〇）年頃から、農学部整備委員会で農学部の東山移転が議論され始めるようになりました。そして一九五九（昭和三四）年伊勢湾台風で農学部建物施設に甚大な被害を受けると、翌年には農学部の東山移転が正式に公表されるようになりました。

◆農学部の東山キャンパス移転

しかし農学部の移転には難問がありました。当時の文教予算では、各大学で特定の土地を財源として差し出せば、それに見合う建設予算が計上できることになっていました。農学部は土地として安城キャンパスと豊川農場を持っていましたが、安城キャンパスは名古屋大学のキャンパスとして安城市が国へ寄附したものであるため、使用目的が変更されれば、安城市へ返却すべき土地でした。ですから財源代替地として安城キャンパスを差し出すことは不可能でした。一方豊川農場を国へ差し出せば、農場のない農学部となってしまいます。このため農学部は、農場の移転先の敷地を、まず探さなければならなかったのです。

その頃、ちょうど愛知郡東郷村にあった東海近畿農場試験場栽培第二部東郷試験場が、愛知用水の完成とともに試験研究が終了したため、その後の対応が問題となっていました。そこで農林省から名古屋大学への管理替を申請し、一九六二（昭和三七）年三月に東郷農場を誕生させました。このようにして農場問題を克服、一九六六（昭和四一）年四月に農学部は東山移転を完了しました。農学部の移転をもって東山移転はひとまずくぎりがついたことになりました。

おわりに　―名古屋大学キャンパスの歴史的特色と課題―

◆早いキャンパス一元化

以上、名古屋大学キャンパスの歴史について、学部を中心にみてきました。これを踏まえ最後に、名古屋大学キャンパスの歴史的特色と今後の課題についてふれておきたいと思います。

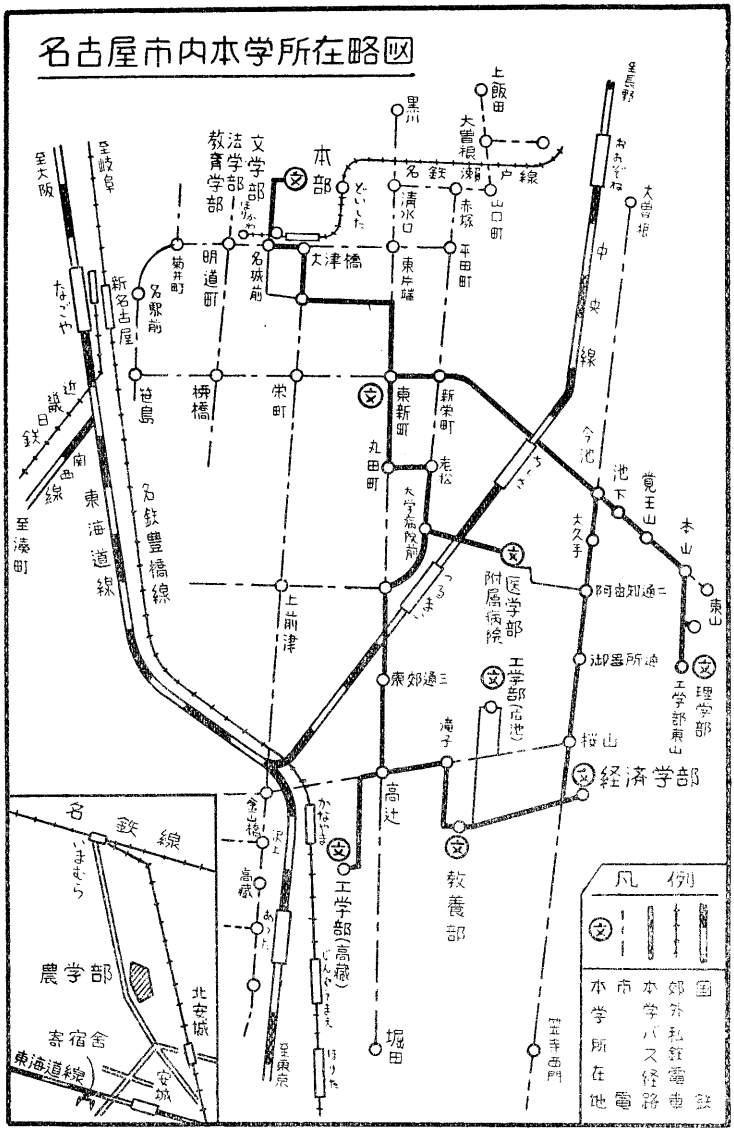
まず、キャンパスの歴史的特色の第一は、戦前からある他の帝国大学、特に東北・大阪・九州に比して、主要キャンパスの一元化が早くに行われたことがあげられます。

東京大学の主要キャンパスは本郷と駒場、京都大学は吉田と宇治、北海道大学は札幌と函館と、二ヶ所に集中しています。いずれも歴史が古く（北海道大学は札幌農学校時代を含めます）、創設当初から、あるいは戦前までにはキャンパスが一元化していたことが大きな理由です（駒場・函館は敗戦後に包括した学校のキャンパスですが、一校だけのキャンパス包括ですみましたし、宇治は包括校キャンパスではありません）。

一方東北大学の主要キャンパスは片平・川内―青葉山など四地区、九州大学は箱崎・馬出など四地区、大阪大学は吹田・豊中・中之島の三地区と、新制地方大学と同様、いわゆる「タコ

足大学」の状態を脱しきれていません。東北大学の創設は一九〇七（明治四〇）年、九州大学は一九一一（明治四四）年、大阪大学は一九三一（昭和六）年と、八高や名高商や鶴舞キャンパスの創設と同じ頃です。それは前述したように都市において市街地が拡大した明治末から昭和初期でしたので、敷地面積にもおのずと限界がありました。また戦後の包括校も複数あり、それも市街地内にあった当時のキャンパスが分散されたままの包括でした。郊外にキャンパスができたのは、九州大学が筑紫の一九八〇（昭和五五）年、大阪大学が吹田の一九六七（昭和四二）年でした。しかし、それでも旧キャンパスから新キャンパスへの全面移転ではなく、一元化はされていません。

名古屋大学もこれまでみてきたように、他の大学と同様複数の包括校がありました。そのため新制発足時期には、やはり「タコ足大学」でした【図21】（次頁）。しかしそれにもかかわらず早くに東山キャンパスに集結できた理由は、創設が一番遅かったため、当時一応の拡大をみた新興市街地の中での新キャンパス建設さえ無理であり、さらにより郊外に敷地求めたという点にあると思われます。一九三九（昭和一四）年という戦時下の創設が、さらにより郊外へキャンパスを求めざるをえなくなり、それが逆に広大な敷地取得を可能にしたといえます。また、優秀な事務局による「建設交換移転」という発想も一因といえましょう。どちらも困難を転じて、逆に一つの先見性という結果になったのです。しかし、現在では東山キャンパスも手



【図 21】1954 年名古屋大学のキャンパス分散状況図

名古屋大学を示す㊏が市内に８ケ所もあり、安城の農学部（図左下）を含め９ケ所に分散していました。

狭になっています。東京大学の柏キャンパスのように、新キャンパスを必要とする可能性もあり、再びタコ足大学に戻らざるをえなくなるのも、そう遠いことではないかもしれません。

◆「緑の学園」

特色の第二点は、創設当初から「緑の学園」を目指してきたことがあげられると思います。緑の山の中に建設されたため、現在の事務局棟と農学部棟を結ぶラインから東南、付置研究所がある地域には、いまだ昔からの森林が残っています。また、キャンパス建設が始まった昭和一〇年代からある理系地区も当初は樹木が伐採されましたが、四谷通から東側の地区はすぐに新たな植林が行われたため、「緑のトンネル」に代表されるように、緑に覆われたキャンパスとして復活しています。グリーンベルトも、四谷通から西側の地区は、両側道に植えられた樹木が三〇余年を経た現在大きく育ち、中心にある中央図書館を含めて、緑の美しい景観をみせています。

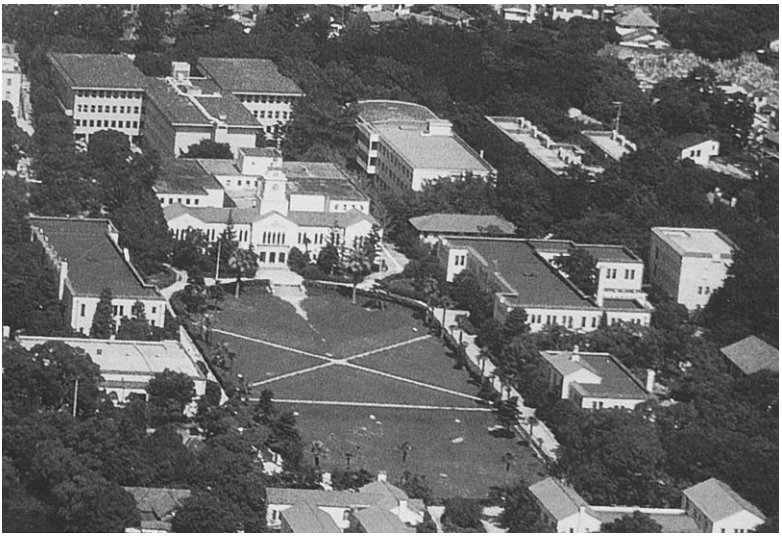
しかし一方で、昭和三〇年代に建設された文系地区や、建物建替がめまぐるしい四谷通から西側の工学部地区は、樹木が著しく少ない状況です。また鶴舞・大幸両キャンパスも同じく緑が少ないのですが、ただしこれは医療技術との関係から緑を押さえているのかもしれません。地下鉄建設が終わった後の、四谷通から豊田講堂までのグリーンベルト東側の整備を含め、昔

の「緑の学園」構想をもう一度ここで思い浮かべ、さらに深い緑に覆われたキャンパスを今後検討していただければと思います。名古屋大学の学章は緑色で、また体育会の機関誌も『濃緑』という名称であり、名古屋大学のスクールカラーは「緑」といえます。この意味を今改めて考えて直してみる時期ではないかと思います。

◆歴史的建物景観の保存

特色の第三点は、歴史を残している建物景観がほとんどないことです。戦前からの歴史を持つ瑞穂・桜山、あるいは敗戦後の豊川・名城・安城各キャンパスは、校舎とともにすでになくなっています。東山キャンパスも戦前に建てられた木造校舎はすでになく、さらに戦後に建てられた鉄筋建築さえも新たに建て替えられようとしています。名古屋大学で一番古い歴史をもつ鶴舞キャンパスでも、戦災にあったことにもよりますが、その戦災で残った図書館も取り壊されてしまいました。古い歴史の名残りを伝えているのは門柱と外塀の一部だけです。

戦前からの歴史をもつ大学の多くが歴史的建物を一部保存しているのとは対照的に、名古屋大学はその歴史の浅さから、逆に歴史的建物景観が保存されていないという現象がおきています。早いキャンパスの一元化もこれを促進させた一因と思われます。もちろん理系は急速に研究が変化しているため、施設・設備を絶えず更新しなければならないという現実を背負ってい



【図 22】関西学院大学キャンパス
景観は一見名大と似ていますが、中央芝生を取り囲む古くからの建物を残しており、新しい鉄筋建築をそのさらに周辺に、旧建物と調和する景観になるように建てられています。

ます。また前述したようにこの地区に緑が少ないのも、建替のため致し方ないという側面はあります。

ですからすべての建物を建替せずに保存し、新規に建物を建てろという現実離れした提案をするつもりはありません。しかし建物自体が大学の歴史を語っていることもまた一つの事実です。歴史的建物景観が大学のアイデンティティの一つになるのです。

たとえば私学の事例になりますが、関西学院大学や神戸女学院大学では、キャンパスの中央に緑地帯を設けており、その点は東山キャンパスと似た配置になっていますが、その周りに歴史の古い校舎を残しています。かつそ

のまわりに増築された新しい鉄筋建築は、キャンパスのこの歴史的建物景観と調和するように配慮されています【図22】（前頁）。国立大学がどこまで、この私立大学のようにできるかはわかりませんが、少なくともその努力はしてみてもよいのではないでしょうか。たとえば京都大学は新規の鉄筋建築でも煉瓦色を基調としており、先の関西の二つの私立大学同様に、旧建物との調和をはかっています。

◆名古屋大学キャンパスマスタープランの課題

名古屋大学の場合、豊田講堂から西へのびるグリーンベルトと、その両脇を囲む工学部1・2・3号館、経済・文・情報文化学部の各建物は、みごとに美しい景観をみせています。このことは「名古屋大学キャンパスマスタープラン'97」にも、「グリーンベルトは、名古屋大学の顔として大切な存在であるので、（中略）向かい合う文系施設との景観調整を常に念頭に置く必要がある」と書かれています。この六つの建物の各玄関には、最近の建物にはあまり見られない半円形の車寄せがあり、特に築五〇年を経る工学部1号館南側建物は東山キャンパスで一番古い鉄筋建築であり、先の木方さんによれば、その玄関はネオクラシシズムに通じる意匠であるといわれています【図23】。前述したように現在1号館の北側建物は壊され、新たに高層建築（新総合研究棟）が建てられようとしてますが、東山キャンパスで一番古い南側建物はま

【図 23】現在の工学部 1 号館南側建物
東山キャンパスで一番古い鉄筋建築です。

だ残っています。これらの建物を、単なるきれいな景観としてだけではなく、名古屋大学の歴史を伝えていく歴史的建物景観として、今後永く残していってもよいのではないでしょうか。

またキャンパスマスタープランには「グリーンベルトに面した建物は低層に抑える」との表現があるのみで、建物保存にはふれておらず、歴史的建物景観の保存という考え方は記されていません。また「開放的で緑豊かなキャンパスの伝統の尊重」「緑の保全・創出」という概説的な説明はありますが、先の『名古屋帝国大学敷地内植樹調査報告』ように、緑についての詳細な調査をし、その上でどこに緑を植えていくかという今後の構想についても、具体的に指摘されていません。これらはおそらくこれから具体的に詰められていくものと思われます。

たしかに「老朽化、狭隘化、旧態化が著しく（中略）相当に時代遅れのものとなっている」とあるように、建築基準法の問題や内装施設の不十分さ、さらに理系おける研究の急速な変化という、現実的課題があることも考慮はしなければなりません。ですから、スクラップアンドビルト方式を全面的に止めようというわけではありません。しかし一方で、前述したようにその歴史的建物景観の保存と「緑の学園」を、やはりいま一度真剣に考え直してみてもよいのではないでしょうか。

◆その他の施設と豊川キャンパス

なお、名古屋大学にはこのほかにもまだ、全国に多くの施設をもっています。その中でキャンパスと呼んでもよいと思われるものに、あと豊川キャンパス（豊川市穂ノ原、前述の豊川キャンパスとはさらに別）があり、ここには太陽地球環境研究所などがあります。

今回は学部を中心としたキャンパスの歴史について述べましたが、別に事務局・独立大学院・附置研究所・各センター・豊田講堂・古川総合資料館・中央図書館・グリーンベルト・学生厚生施設などを取り扱った続編も考えております。豊川キャンパスについても、その際に改めて触れてみたいと思っております。

〈引用文献・参考文献等〉

『名古屋大学五十年史　通史一・二』（名古屋大学、一九九五年）
『名古屋大学五十年史　部局史一・二』（名古屋大学、一九八九年）
『写真集　名古屋大学の歴史　1871〜1991』（名古屋大学、一九九一年）
『名古屋大学一覧』（各年度）…【図7】
『名古屋大学概要』（各年度）
『名古屋大学要覧』（各年度）…【図17・21】
『名古屋大学のプロフィール』（各年度）
『校友會雜誌　第参拾四號　新築開校記念號』（愛知醫學專門學校々友會、一九一四年）…【図1】
『自明治六年至同十三年　愛知縣公立病院及醫學校　第一報告』（編輯局）…【図2】
『愛知縣立醫學專門學校愛知病院新築落成式紀念帖』（愛知縣立醫學專門學校愛知病院新築落成式協賛會、一九一五年）…【図4】
『（大正二年十二月）　愛知縣立醫學專門學校及愛知病院一覽』…【図5】
木方十根「愛知医科大学時代の施設拡充について」（『名古屋大学史紀要　第七号』名古屋大学史資料室、一九九九年）…【図5】
木方十根「旧愛知医専・愛知病院の門と塀」（『名古屋大学史ニュース　第六号』名古屋大学史資料室、一九九九年）

『名古屋大学医学部九十年史』（名古屋大学医学部学友会、一九六一年）
『名古屋帝國大學一覽　昭和十七年』（名古屋帝國大學）…【図10】
『昭和十七年二月　名古屋帝國大學概況』…【図11】
澁澤元治『我等の學園』（一九四三年）
本多静六・稲垣龍一『名古屋帝国大学敷地内植樹調査報告』
木方十根「創設期の東山キャンパス計画　―営繕顧問・内田祥三の資料を中心に―」（『名古屋大学史紀要　第六号』名古屋大学史資料室、一九九八年）
須川義弘『半生を顧みる』（須川徳子、一九八二年）
『平成4年度キャンパスプラン委員会報告　名古屋大学工学部施設整備構想』（工学部キャンパスプラン委員会、一九九三年）…【図13】
『伊吹おろしの雪消えて　―第八高等学校史―』（財界評論新社、一九七三年）
『名古屋大学経済学部五十年史』（財界評論新社、一九七七年）
『岡崎高等師範学校誌』（岡崎高等師範学校学生會、一九五〇年）…【図15】
『新修名古屋市史　第六巻　附図』（名古屋市、二〇〇〇年）…【図19】（実物は名古屋市市政資料館所蔵）
『名古屋大学農学部創設について』（名古屋大学農学部創設後援会、一九五二年）
牧島久雄『名古屋大学農学部学生のガイダンス　昭和37年3月』
『関西学院大学　文学部60年史』（関西学院大学文学部、一九九四年）…【図22】

『名古屋大学キャンパスマスタープラン'97』（名古屋大学、一九九七年）

農学部
工学部
6号館
共同教育
研究施設
職員会館
(食堂・喫茶)
名古屋大学
シンポジオン
事務局
名古屋大学
インターナショナル
レジデンス

東山キャンパス現況図

100万Ｖ超高圧電子顕微鏡研究室
グリーン
サロン東山
超高圧力高温実験室
先端技術共同
研究センター
至本山
四谷通三丁目
交差点
第１・第２
理科系食堂
８号館
９号館
「緑のトンネル」
学生会館
５号館
Ｇ
工 学 部
Ｆ
Ｄ
Ｃ
北部厚生会館
４号館
Ｅ
理 学 部
Ｂ
鏡ケ池
工 学 部
７号館
中央食堂
教育学部
附属中高等学校
工学研究科
１号館
郵便局
Ａ-２
Ａ
体育館
工
学
部
２号館
１号館
３号館
豊田講堂
プール
市バス
名古屋大学前
停留所
図書館
守衛室
Ａ館
経済学部
文 学 部
総合保健体育
科学センター
保健管理室
情報文化学部
人間情報学研究科
言語文化部
法学部
教育学部
人間情報学研究科
国際開発研究科
南部食堂
アメニティハウス
（食堂）
南部厚生会館
至八事

著者略歴

神谷　智（かみや　さとし）

一九五七年、愛知県生まれ
一九九一年、名古屋大学大学院文学研究科博士課程（後期課程）単位取得退学
現在、名古屋大学大学史資料室助手
専攻　記録史料学

名大史ブックレット2
名古屋大学　キャンパスの歴史1（学部編）
二〇〇一年二月二〇日　第一刷発行
二〇〇一年九月一〇日　第二刷発行

著者　神谷　智
編集発行　名古屋大学大学史資料室
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
電話　〇五二（七八九）二〇四六

印刷所　株式会社　クイックス
〒456-0004　名古屋市熱田区桜田町一九―二〇
電話　〇五二（八七一）九一九〇

表紙写真：緑のトンネル

工学部5号館付近から四谷通方面を望む（本文29～30頁参照）。